

平成20年度市民海外交流団報告書



期間 :平成20年10月26日(日)~11月2日(日)

派遣先 :スウェーデン王国 ウッデバラ市

岡崎市

目次

ウッデバラについて.....	P3
交流報告.....	P4
交流団名簿.....	P7 2
日程表.....	P7 3
お世話になった方々	P7 4

表紙写真 :ホテルカーリア正面玄関前にて



スウェーデン王国 ウッデバラ市

提携 1968年9月17日
人口 50,314人(2005年)
面積 641.80平方キロ

ウッデバラ市はスウェーデンの西海岸に位置し、ヴェストラ・イエータランド(県)にある中核都市で、首都ストックホルムの西南西400キロ、スウェーデン第2の都市イエテボリから車で1時間のところにある。スウェーデン語で「ウッデ」は「岬」、「バラ」は「壁」を意味し、その地名の由来のように美しいフィヨルドの入り江の奥に面したまちで都市環境整備や自然保護に力が入れられ、充実した社会保障と高い文化水準を誇っている。

平成20年度 市民海外交流団 交流報告書

団長 須賀 勉

1、はじめに

平成20年は、岡崎市とスウェーデン・ウッデバラ市との、姉妹都市提携が、40周年という節目の年に当たります。10月27日に行われた、姉妹都市提携40周年の記念式典は、岡崎市長をはじめとする市代表団、中学生使節団、我々市民海外交流団、このほか岡崎市国際交流協会のツアー団体、「ウッデバラ友好の翼」の、総勢30名の岡崎の市民が、一堂に出席して、姉妹都市提携40周年に、ふさわしい記念の式典になりました。翌日は、地元のローカル誌が、柴田岡崎市長とラルフ・スティーン市議会議員の雪見灯籠の除幕式の光景を、一面で紹介しました。また鮮やかな朱色のユニホームを着けた少女バトンガールと、地元音楽隊の「さくら・さくら」のコラボ・演奏に、外地で聞く日本の唱歌に、あらためて胸にくるものがあり、涙線が緩みました。人口50、000人の北欧の小都市ウッデバラ市との、姉妹都市提携が40年も続き、その節目の年に贈られた“仲良しの像”「岡崎の花崗岩で造られた像・・・姉妹都市提携した由来がお互いの街が、花崗岩の上にできた街ということで、姉妹都市提携を結んだ経緯がある・・・」は、頭をなでると愛をもらえると、地元のメディアに取り上げられたこともあり、今では、市民の愛称像(マスコット)になっていると、現地のツアーガイドの説明がありました。後日写真撮影のためみんなで訪れたとき、みんなが頭部をなでて通るため、つるつるに「黒光り」していました。またウッデバラ市の新市庁舎から海を眺望できる特等の一角に、1988年に贈られた「友好の灯」と刻まれた石灯籠が、花や植木に囲まれて、大切に設置されているのを見て、あらためてウッデバラ市の、姉妹都市岡崎への思いが感じられました。また、ポーفسレン博物館に展示されている、岡崎市の小中学生から贈られた、「絵画展」に、柴田岡崎市長も出席され、テープカット(除幕式)が行われました。今後50周年に向けて、ますます両市の交流は、盛んになることが期待されます。それに加えて毎年行われている中学生の相互ホームステイ、また今回で2回目になる市民海外交流団のホームステイ等、市民レベルでの交流活動が盛んになることが、お互いのナショナリティー(国民性)やアイデンティティー(こころね)を知る機会となり、お互いの理解が深まれば、お互いに好き(ファン)になる、そんな市民レベルでの交流活動に、意義があると考えています。

以下は、交流団日程に従いホームステイを含め、滞在記録としてまとめさせて頂きました。

2、第一日目

、(セントレア出発)

中部国際空港を出発してヘルシンキ(フィンランド)まで、フィンランド航空で所要時間10時間10分と、かなりの飛行時間です。座席は全席満席でした。実は後で分かったことですが、燃油サーチャージが日本航空等に比べて30%から40%も割安で、

中部ヨーロッパのハンガリーやチェコ周辺のツアーも、今ではフィンランド航空にシフトしているということです。幸い通路側の席になり所要を足すのに都合が良いと安心しました。隣は市随員職員の廣山さんでした。長時間の飛行時間でしたが、途中揺れもほとんどなく、客を飽きさせない設備（タッチパネル）の進歩で、快適に過ごせました。ヘルシンキには現地時間の15時10分（日本時間22時10分）に到着しました。

、（ヘルシンキ出発）

ヘルシンキからイエテボリへの乗り換えは、40分程しかなく、降りて直ぐ通関手続きを済ませて、イエテボリ行きのフィンランド航空に乗り込みました。両サイド2人掛けで、比較的小型の飛行機でしたが、満席でした。所要時間1時間25分でイエテボリに到着しました。

、（イエテボリ出発）

通関を抜けて交流団員の松井さんの荷物（ボストン・バッグ）が未着で、初対面の日に“お土産”をホストファミリーに渡せないのを心配されていました。（実は日本と違ってヨーロッパでは、2～3%は誤差の範囲内という添乗員の説明もあり、前日出発した市代表団の荷物も未着があったとのことでした）トラブルなしとはいきませんでした。ウッデバラ市のラーシュさん（男性市職員）とアグネッタさん（女性市職員）、現地の日本人通訳の温かい出迎えを受け、ウッデバラ市行きのバスに乗り込みました。車内では、早速、アグネッタさんが「かたことの日本語を交えて」ようこそウッデバラ市へと、適度に笑いを取りながら、あっという間にホテルに到着しました。ただ車窓から眺める景色は薄暗く雨でした・・・。

、（カーリアホテル泊）

街一番（好立地）のカーリアホテルに到着して、歓迎の夕食会が始まるまで1時間、身体中からジェット機の微振動が取れず、荷物の整理もそこそこに、ホテルのベッドに30分程横になり、やっと一息つきました。夕食は隣のレストランに準備されていました。10年ほど前に岡崎に交流使節として来たことのある、名前は忘れましたが市議会議員の長い話に皆さん疲れていましたので、少し不評だったようです。実は我々Essay Contest Winners' Group「市民海外交流団」も名前だけでも自己紹介したかったのですが、止めました。夕食にだされた料理は、コック長から説明があり、きのこ入りの野菜炒め・サラダ・メインの白身魚（フライした魚に、マヨネーズ風のドレッシングをかけたもの）とポテト（スウェーデンでは、メインデシュに蒸（ふ）かしたポテトは、いつも付いていました）ヨーグルトで固めたデザート、パン、ビール、ジュース、炭酸入りの水でした。味が分からない為、一口ずつ皿に取って口にいれてみましたが、どの料理も味付けを、間違えたのではと思えるほど“塩味”で、身体が受け付けませんでした。最後に海に住むザリガニの一種の小エビを、小皿に取ってもらいましたが、これも“しょっぱくて”食べられませんでした。世界でも有数の長寿を誇るこの国で、高血圧・高脂血症・肥満等、内脂肪症候群（メタボリック・シンドローム）の生活習慣病は、問題

になっていないのか不思議な思いが、一瞬頭を過りました。歓迎会が終わり早々にシャワーを浴びてベッドの人となりましたが、1～2時間置きに眼が覚めて、なかなか眠りに就くことが出来ませんでした。

3、第2日目

、(記念式典)

ホテルから記念式典の行われる市中心部の旧市庁舎へは、みんなで歩いて行きました。途中の街並みはカラフルで美しく、落ち葉が風に舞っている以外はゴミもなく、中央部のモザイク状に石を敷詰めた道路は、歴史の古さと落ち着きを感じました。記念式典は、両市長の挨拶に始まり、姉妹都市提携40周年を祝して、岡崎市からは鎌倉時代に造られた赤緋(あかおどし)・黒緋(くろおどし)の甲冑(かっちゅう)一式のレプリカが、寄贈されました。その後、小中学生の「絵画展」の除幕式(ポーフスレン博物館)に向かう、ウッデバラ川沿いの街並は美しく、当方一番の、お気に入りのスポットで、もちろんカメラにしっかり収めて来ました。また道路沿いの宣伝用の看板も、郊外を含めてウッデバラ市では、ほとんど見かけませんでした。

、(ゴミ焼却場)

産業廃棄物(家庭ごみ含む)の処理(焼却)の問題は、今やどこの都市でも、地球温暖化や環境汚染(食の安全を含む)の問題(水質・地質・外気含む)で、行政でも一番に取り組まなければならない重要案件です。ウッデバラ市では、郊外の一角に広い敷地を確保して、残廃を燃やして、エネルギーに変える大型(市としてはかなりの予算を費やして)の焼却設備を、建設中(一部稼働)でした。残廃焼却で出る排煙の浄化に“繰り返し”、“繰り返し”水を使い、外部に汚染水や排煙をださない設備を、説明に立ち会った技術者が、多少自慢げに解説していました。建設費用は8億クローネ、日本円換算(8億クローネ×15円)で、120億円です。これだけの焼却設備が120億円で、日本で建設できるとは、とても思えません、汚染水の浄化の技術は、日本でも十分可能な技術であると考えています。“初めの一步”が大事、何かを始めなければ地球の温暖化防止にはなりません。残廃を燃やして排煙を垂れ流し、温暖化に協力するような無秩序なやり方は、今やどこでも許されるはずもありません。今回ゴミ焼却場を見学された、各交流団の皆さんも、同じ思いをされているのではないのでしょうか？

、(雪見灯籠除幕式)

はじめに(前項)で除幕式の模様は、紹介しましたので割愛させていただきます。

、(ホストファミリーとの初対面)

小雨交じりで始まった“雪見灯籠”の除幕式も、最後の辺りになり激しい雨になりました。そして終に、氷(ひょう)が落ちてくるなかで、バトンガールの少女達が、音楽隊に合わせて懸命に踊っているのが印象的でした。式典も終わり添乗員の坂本さんに、今回のホストファミリーのアントン氏を、落ちてくる氷の中で紹介されました。挨拶もそこそこに、旧市庁舎裏の駐車場に乗り着け、庁舎の中で改めて挨拶しました。ここで

ホストファミリーについて、あらためて紹介します。実はホストファミリーがなかなか決まらず、10月23日に市から連絡を頂きメールの交信は1回だけでした。当方の簡単な自己紹介を兼ねた家族の紹介に、次のようなメールを翌朝受信しました。「メールありがとう。家族は4人で、みんな元気であること、息子は40歳でウッデバラ市・市民課職員、娘36歳は、ストックホルムで音楽の先生をしていること、孫はまだ1人もいないこと、夫アントンは69歳で、学校の先生をしていたこと、今は心理学者として時々仕事をしていること、最後に、私“エバ”は65歳で、38年間学校の先生をしていて、最後は校長で、2年前に退職して、現在は、市の予算管理の仕事をしていること、そんなわけで昼間は忙しいこと、“エバ”と“アントン”と呼んで欲しいこと、ウッデバラ市へようこそ、みんな歓迎します。逢えるのをとてもわくわくして楽しみにしています」と、そして当方のメールの最後に、甘いものは好きか、の問いに・・・We like sweets!とありました。これで日本からの“土産”は決まりました。旧市庁舎を後に、アントン運転の右側通行、左側ハンドル(ギアチェンジは、日本ではほとんどオートマですが、スエーデンではミッションが主流の様です)のミニバンで自宅へ向かいましたが、日頃日本の左側通行に慣れている当方としては、通行感覚が全く違うため、アントンが急ハンドルを切るたびに“ひやひや”しました。途中会話も途切れがちでしたが、ちょっと心配になり、今夜の歓迎夕食会のスケジュールについて、知っているかと聞いたら“Yes”ということで、安心しました。

、(ホストファミリー宅へ)

雨の中まわりの景色を見る間もなく、上り坂の途中にあるホストの自宅に到着しました。ドアを開ける前に中に犬がいること、犬は大丈夫かの問いに「OK」と答えました。名前は“ルーファ”(雌2歳)だと教えてもらいました。玄関脇に荷物を置いて、全体の部屋を、先に案内してもらいました。坂の途中にあるため玄関は2階にあり、私の部屋は半地下の1階で、娘が家を出るまで使っていたということでした。Take it easy(ゆっくりして・・・)とのことで、歓迎夕食会へ出かけるまで、着替えてゆっくりしました。そのうち仕事から“エバ”も帰って来ましたので、握手して“お世話になります”と挨拶しました。早速、リビングで日本から持参した土産の披露をしました。家族は甘いのが好きとエバのメールで知っていたので“備前屋の”手風琴、栗ころ、お月さま、また、かりんとう等の駄菓子類、急須、湯呑、お椀(漆器)、箸、それに妻が仕事帰りに買って来た持たせてくれた、2枚の風呂敷と、レトルトのカレー、レトルトのご飯、インスタントラーメン。これらは最後の日に日本から持参した食材を使って、当方が料理して、滞在のお礼にしたいと伝えました。包装紙を全部オープンにしたら、アントンが風呂敷を首に巻き(ネッカチーフ)次に二つ折(スカーフ)にして頭にかぶり、両手を広げておどけて見せたので、これが文化の違いかと内心思いながら、3人で大笑いしました。土産の話に夢中になっていたら、エバが、歓迎夕食会出発の時間だと、慌てて言ったので、急いで着替えて出発しました。

、(歓迎夕食会場で)

実は出発前の最後の説明会(10月20日)の後、歓迎夕食会で“ 剣道 ”の形(かた)の演武披露をして頂きたいと、市担当のOさんから依頼を受けていました。9 . 11のテロ以来、手荷物検査が厳しい旨、木刀の持ち込みは如何なものか . . ? の問いに、ウッデバラには、剣道愛好者の練習クラブもありますので、道具は現地で準備させるとのことで引き受けました。ここで話は、海岸沿いの高台にあるポーガーデンホテルの歓迎夕食会場に戻ります。開場直後(食事前)の7時から空手の形、剣道の掛り稽古、剣道の形の順と、突然知らされて、慌てて控室に稽古着の着替えに走りました。控室をノックして入ったら180センチを超える7~8名の大男が、空手着、剣道の防具を着けて、既に準備していてびっくりしました。稽古着を貸してくれるよう話をしたら、Sohey Afshar(ソヘユル・アフシャル)と書いた小さなメモ(ネームカード)を渡して、自分の稽古着を使う様に言って、貸してくれました。時間がない中で慌てて着替えたものの、袴の前側(当方の身長は160センチ)が20センチ程長く、横紐に“ ぐるぐる ”巻きにして事なきを得ましたが、後ろ側は胃の上側できつく結びました。空手と剣道の演武が終わって、いよいよ私の番です。予め準備した日本語版の解説を、市随行員の廣山さんに、英語版を添乗員の坂本さんに、急ぎよ読んでもらいました。正面、相手への礼の後、1本目の形で右足を一步踏み出した瞬間に、床板の「パチン! 」という乾いた音で、一気に精神を、集中させる事が出来るのですが、今回は「音」がしませんでした。床が「じゅうたん」だったからです。夕食会の最後に、中学生のパフォーマンス(歌とダンス)が有り、当夜一番盛り上がりました。「世界に一つだけの花」に続き「聖者の行進」のときには、客席から自然と手拍子が起り、演技が終了して最後の1人が、会場を退場するまで、手拍子が鳴りやみませんでした。事前に特訓した英語のスピーチと、法被(はっぴ)姿は、ナイス・イケテいました。

4、第3日目

、(ホストファミリー宅での初めての朝食)

朝起きたときには、アントンは狩猟のコーチに出かけたとかで、エバと2人だけの朝食でした。テーブルにゆで卵、オレンジジュース、紙パック1.5L入りのミルクとヨーグルト、エバのどちらにするかとの問いに、ヨーグルトを選びました。ヨーグルトを注いだ皿にシリアルを入れて、次にりんごのジャムを混ぜてスプーンで一口飲んでみました。りんご味がわずかにするだけで、ヨーグルトは無味でした。食パンは日本の1/3サイズのもの茶褐色の半月形の2種類でした。私は、バターにアントン手作りのママレードを付けて食べましたが、エバはパンにニシンをすりこんだマヨネーズを付けて、チーズと生ハムを挟んで食べました。エバが、アントンはバターとママレードで、私はチーズと生ハムで食べるのが、好きだと話していました。毎日同じ食事だと言っていましたので、贅沢というより質素な感じを受けました。最後に当方の土産の湯呑に、エバが熱いコーヒーを入れてくれました。日本語で“ ごちそうさま ”と手を合せて言ったら、

エバガスウェーデンでは、Bless（ブレス）だと教えてくれました。

、（旧市庁舎での行政サービスについて）

先の大戦の経験を経て、福祉社会国家の実現を目指して“社会民衆党”が長く政権を率いて、仕事、住居、学校（教育）、医療等の確保を、政策の優先課題に掲げてきましたが、現在は野党になり、政策に多少の変化が起きていることなど、通訳を介して説明がありました。また旧市庁舎にある市民課は、今では岡崎市に例えるなら、大平市民センターのような出先機関の役割で、市民の広報支援窓口として消費・生活支援（引っ越し・住宅の貸し・借りの相互情報の提供等）のアドバイス、生活困窮者への情報支援活動、インターネット、ファックス等のサービス提供を行っているとのことで、岡崎市の出先機関に比べて、かなり広範な支援活動を行っているように感じられました。次に通訳を介しての話になりますが、ウッデバラ市では40種類以上の言語が話され、市における移民の構成も50%を超えているということでした。その為、市も窓口を設けて移民の共生支援（自立支援含む）のコンサル、子育て支援、教育、生活に必要な助言、母国語での通訳のサービス等を行っているということでした。一方、岡崎市でも日系2・3世のブラジルからの里帰り移民の方が6千人、また、外国人全体では、12千人を超えています。10年後、20年後のことを考えれば、言葉の壁をはじめ、共生支援は、行政でも民間でも急がれるところです。次に社会福祉課の担当者の説明では、身体にハンデのある方も、健常者と同じように生活ができるように、生れてから年金生活に至るまで、住居と仕事の確保を支援する様に法律で決められていると、通訳を介して話がありました（通訳を介してのメモ書きから引用していますので、事実は一部違うかもしれませんが）。また街に衣類のリサイクルボックスを設けて、定期的に回収して値段を付け近くの施設で販売し、第三国へも一部送っているという説明がありました。整備して値札を付けるワークは、障害者施設で自立を目指して働いている人という事になります。リサイクルは日本でも行っていますが、市内に23か所ある障害者施設を、積極的に活用していることは、目新しいことではないでしょうか？

、（ボーフスレン博物館）

長い間、氷河の中にあったウッデバラ周辺は、海岸線の地域という意味だと館内の担当者から説明がありました。22年前に開館して、当時の展示物から新しい物まで展示しています。最初に、1600年頃使用されていた、オランダ製のコンパスを模試した床板に、海は、喜び、悲しみ、自由、誇り、愛、太陽は日が昇ると光輝く、沈むと暗くなる海洋生活者の場面が描かれていました。またカール・ウスタフ・ベンハーダソン（1915～1998）は、小さい時から育った記憶を絵に表し、描いた絵の裏に文章を残しています。そのテーマは「境界」、国と国、民族（人種）、地域、政治、言語、文化、仲間、家族、人は時によって変わり境を作り、また除外します、あなたにとっての「境界」とはなんですかと、あらためて問われてみれば“重い”言葉です。見学が終わって、

みんなで館内にあるコーヒーショップで休憩しました。そのアップルケーキは、甘くて美味しかったです。

、(スウェーデン方式大丈夫・・・?)

ダイケアセンターの見学レポートは他の方に譲るとして、現地日本人通訳の話である。年間の自己負担の医療費が2万円、また別に薬剤(薬代)の費用が年間で2万円という説明でした。ただ病気(頭部の腫瘍)になり、初めて行く病院は、診療所(クリニック)次に、病状が進み専門の病院で診てもらうためには、医師の紹介状がないと、診てもらえないという事でした。やっと紹介状をもらって、専門の病院で受診(6か月後)できたときには、手遅れで、その後に亡くなったという説明がありました。ただ高額の治療費を払えば、治療を受けられる病院もあるという、裏の話を聞いて“唖然”としました。最近、東京の緊急病院で、緊急患者の受け入れ拒否をしている間に、妊婦の方が亡くなるという悲惨な事件はありましたが、岡崎市でも医療費は中学3年卒業まで無料です。法のもと、広く万民に、平等に、医療保障(健康保険、介護保険等)や社会保障(年金等)が、受けられる日本の方が、制度的にも優れているのではないのでしょうか?

、(ウッデバラのスーパーマーケット)

アントンがボーフスレンの博物館に迎えに来て、途中ガソリンスタンドで給油しました。セルフ・サービスで1リットル12.14クローネ、日本円換算で12.14×15円で182.1円でした。10月25日現在、日本では140円でしたので、30%ほど高いことになります。次にアントンが、スーパーマーケットに立寄りましたので、素早く食料品の値段をメモしてきました。下表を参照下さい。

市内のスーパーマーケットの食料品の価格

単価クローネ・・・日本円換算は×15円

品名	クローネ	単位	品名	クローネ	単位	品名	クローネ	単位
レタス	22.9	kg	サーモン	49.9	700g	卵	19.9	10個入
トマト	29.9	kg	チーズ	45.9	500g	トイレペーパー	16.8	8ロール入
キュウリ	24.9	kg	牛肉	77.9	kg	バター	24.9	500g
ブドウ	26.9	300g	コーヒー	47.9	200g	ライス	24.45	kg
キーウイ	2.9	1個	チイバック	20.9	25袋入	新聞	10.0	1部
パン	19.9	550g	ミルク	9.5	1.5L	キッコーマン	36.9	500ml

消費税が25%入っています(内税)

チーズは陳列ケースの両サイドを占めていましたので、種類がかなり豊富でした。アントンがキッコーマン・ソース(日本では醤油、しかし現地の味に合わせてありました)を知っていたので、日本の醤油が北欧でもメジャーになっていました。ミルクとライス以外は30%前後、日本より高いようです。またサーモンと一部のチーズ以外は、フランス、デンマークなどEU圏からの輸入品でした。また、果物はアフリカや南米からの輸入品もありました。スウェーデンはEUには加入していますが、ユーロには加入していません。食糧品の自給率は、現在どうなっているのか少し気になりました。

、(ウエルカム・ディナー)

アントンの両親はイタリアからの移民という。大きな額縁に入った父母の写真を飾ったリビング兼食堂で、年代物のろうそく立てに火を灯しました。そして日本酒と赤ワインで乾杯しました。大皿に“ぼろぼろ”の味付きのご飯も炊いて有りました。小皿に取って早速、土産の箸で、使い方を2人に教えました。アントンは上手でしたが、エバは難儀していました。ライスは月に1～2回程度食べるという事でした。Tomは、との質問に、Every dayと応えました。Sill(ニシンの酢漬けでスウェーデンではポピュラーな食べ物の様でした)、パン、ラザニア、サラダ等、最後に、グリーンピースとムース(ヘラジカ的一种)の肉を蒸したのを、出してくれました。ムースは、後足のモモ肉が柔らかく、一番美味しいと言っていました。前足はボイル(煮込み)が、一番と言うことでした。肉は蒸しただけで無味でしたが、柔らかかったです。味付けはキッコーマン・ソースで食べました。アントンは狩猟が趣味で、今年は10人で1頭捕ったとの事でした。ただ希少動物らしく、狩猟期間は年間に1週間だけだ、と言っていました。2002年には、200kgを超える大物が捕れたと、クレーンで吊り上げた写真を自慢げに見せてくれました。ムースの肉は冷凍庫で3年間大丈夫だと、保存の良さを自慢していました。

、(紙芝居の紹介)

私達多くの日本人は、幼稚園(小学校含む)で、また母親が図書館から借りてきた“日本昔ばなし”等の紙芝居の読み聞かせを通して、善悪や道徳心、そして日本人の心を学んで来ました。子育て時代の優れた日本の文化の一つである紙芝居を、ホームステイ先で紹介するのが、今回の目的の一つでした。図書館からリサイクル用の紙芝居を持って行きましたので、食後、花咲じいさんを、最初に紹介しました。”ポチ”はエバとアントンの愛犬である“ルーファ”と読み替えました。読み終わってエバがファンタスティック・ビューティフルと連発しましたので、分り易い絵(紙芝居の特徴)から、ストーリーは、理解してくれたと思いました。ただその奥にある、正直に生きる者と、不正直に生きる者との比較を、子供時代に、紙芝居を通して学ぶと言うところまでは、当方の英語力では、うまく伝えられなかったのが残念です。

5、第4日目周辺観光

ウッデバラ市周辺で、一番古い教会の見学に行きました。道路沿いの畑の中に建っていました。中に入ると正面の壁にモーゼとキリストの壁画が、描いてありました。日本でも古い神社や寺院が保存されていますが、この国でも古いものが、大切にされているようです。ただスウェーデンの人たちは日本人と同じで、苦しい時の神頼みで、普段は教会にほとんど行かないと、現地日本人のツアーガイドの説明が有りました。そのうち教会の管理人とアグネッタさんが、“洗礼”の時に歌う聖歌を歌いましたので、私達は、お礼に国歌を歌う事になり“君が代”と“ふるさと”を歌いました。昼食は海沿いのLAX・レストランでサーモン(さしみ)のドレッシングがけと、ポテトと野菜サラダのプレートを食べました。さしみは、やっぱり醤油が美味しいです・・・!

6、第5日目

、(世界遺産見学)

2千年から3千年前に、岩を刻んで子孫にメッセージを残そうと、祖先が岩に描がいた世界遺産の「ターヌムの岩絵」を見学しました。動物、狩の様子、愛、死者を送る船、岩を刻んで子孫にメッセージを残そうとした、先人の思いを感じました。時々ペンキで補正が行われているらしく、鮮明に描かれていました。近くを小川が流れていましたが、ウッデバラ川同様、赤土をとかして流れているらしく茶褐色をしていました。帰りは日本人設計による、「ウッデバラ大橋」を通り帰りました。マストの両側に、三角形にロープを張った美しい橋は、いかにも日本人設計の感じを受けました。

、(ホームステイ最後の日・日本食の紹介)

エバは、友人とのオペラ観劇の約束とかで朝から出かけて、夕食時間はいませんでした。日本から持参した食材で、アントンと夕食の準備を始めました。レトルトのカレーは鍋に水を入れて沸騰、インスタントラーメンも沸騰した鍋に入れました。ご飯は600Vのマイクロウエーブ(レンジ)で2分間、あっという間に出来上がりました。ラーメンは、火力が強くて少し伸びてしまいましたが、調理を始めてから15分も経っていません。アントンがびっくりしていました。時間がない時には、日本ではこんなもんだと言ったら笑っていました。味も Very good! と親指を立てて、全部平らげましたので嬉しかったです。デザートはコーヒーと、日本から持参の手風琴、栗ころ、こちらも Very delicious! と、あっという間に食べてしまいました。甘いものが好きな夫婦でした。ただ、台所は電化されていましたが、食器洗い機は自動洗浄機で、レンジは600Vと、当家より電化されていませんでした。その後、市から贈られた岡崎の街を紹介したDVDを、アントンが見たいとセットしましたが、規格(フィリップ製)が異なるのを見ることが出来ませんでした。また日本の、“くらさわ”は、スウェーデンでも、大変有名だという話になり、“くらさわ” “くらさわ” “なぜ日本人のTomが、知らないのだと、アントンが、ケゲンな顔をしていました。そのうち百科事典を持ち出して来て、“どですかでん” “どですかでん” と振りをつけて言いましたので、直ぐに黒澤映画監督の事だとわかりました。“くらさわ”でなく“くろさわ”だと訂正しました。相手に教えたい、伝えたい、相手の言っていることを理解したい、そんな小さな言葉の交流から国際交流が始まるのではないのでしょうか？

7、第6日目・(ホストファミリーとの、別れの朝)

カーリアホテル出発が、朝8時の予定です。前夜7時に起床の約束をしましたが、早めにアントンが起こしにきました。朝食が終わって、冗談を言いながら夫婦で台所の片付けをしている。実に仲の良い夫婦だ。聞けば朝食は、いつもアントンが作っているという。愛犬のルーファも連れてホテルに着いたら、既に、皆さんホストファミリーとの、別れの挨拶をされていました。バスにボストン・バックを乗せて、3人で最後の記念写真を撮りました。涙線がゆるい方なので早めにバスに乗り、手を振ってこらえるのがやっとでした。

8、最後に“異文化を学ぶ気持ちを持つ”

アメリカ発の金融危機で好調だった新興BRICsも、半年前の勢いは有りません。共産政権崩壊後、久し振りに資源外交で存在感をアピールしていたロシアも、株価の大幅下落で2日間ほど、証券市場の閉鎖に追い込まれました。今や世界は、好むと好まざるかに関わらず、グローバル化の波にさらされています。今回参加された交流団員は、50歳代、60歳代の皆様でした。次回は若い人も参加して欲しいと思っています。年齢を重ねてからでは、頭も身体も早い変化についていけません。若いときからチャンスを捉えて、どんどん出かけて世界を知り、そして日本の良さを世界にアピールして積極的に、異文化交流に努めて頂きたいと思っています。ストックホルム最後の夜、ホテルの一室で“打ち上げ”をしました。それぞれみなさん、今回の交流目的を持って参加されていました。ごみ、福祉、移民の問題と、目的意識の薄い当方としては、恥ずかしい限りです。皆さんの交流レポートを、拝読させて頂くのをとても楽しみにしています。・・・市代表团、中学生使節団、市民海外交流団、友好の翼の皆様“お疲れ様でした”・・・



地元音楽隊とバトンガールの「さくら・さくら」のコーボ・演奏に涙線が緩みました。激しい雨の中、最後まで懸命に踊っていたのが印象的でした。



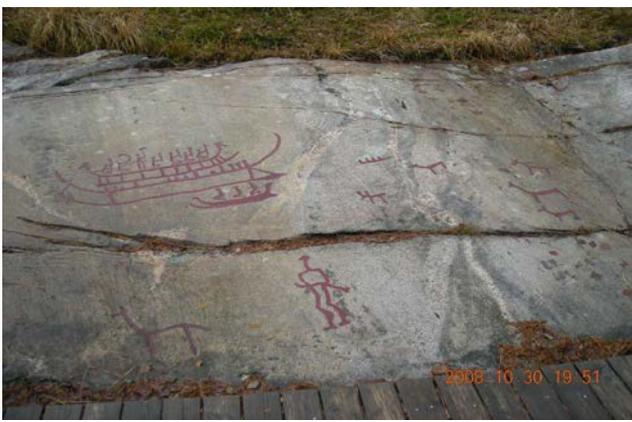
なだらかで水量豊富な茶褐色のウッデバラ川と、美しい並木。



日本から持参した食材で作ったレトルトのカレーとインスタントのラーメン（茹で過ぎて伸びた為、汁が入っていません）。



はなさかじいさんを読む“アントン”、日本の子育て時代に使われる文化（紙芝居）の紹介をしました。



世界遺産「ターヌムの岩絵」、子孫にメッセージを残そうと岩に刻んでありました。動物、狩の様子、愛、死者を送る船・・・周辺に散在していました。



2本のマストからなる美しい「ウッデバラ大橋」日本人の設計です。



お世話になったホストファミリーのエバとアントン、そして良く躰けられた二人の愛犬“ルーファ”花さかじいさんでは、“ぼち”を“ルーファ”と読み替えました。

北欧の国スウェーデンに学ぶ

青山 道雄

1 はじめに

私はこのスウェーデンへの市民海外交流団の募集が目にとまった時、胸の鼓動が高まった。それは私が最も訪れてみたい国だったからである。高緯度に位置する人々の生活、世界で最も政治や経済などが安定していると聞く北欧の国、スウェーデン。これを支えている学校教育や社会教育はどのような特色があるのか。また豊かさ「世界1位」と言われているが、具体的にはどのようなことなのか。その1つ、社会保障や福祉の最も進んだ国といわれるその制度。そしてEU統合により、多くの外国人の移住者が増えているという事実。この他にも環境の先進国など多くのことが学べるスウェーデン。またとないチャンスである。その上ホームステイも体験できる。こうしたことが頭をよぎり心は躍った。そしてついに夢が叶い、市民海外交流団の一員として参加させていただくことになった。ここにまとめることはスウェーデンのウッデバラ（北緯58.5度）という一地方都市、また一軒の家庭の生活（ホームステイ四日間）からの検分ではないけれど、スウェーデンで学んだことを基に自分の生き方、考え方をまとめてみることも大切と考え、思うままに書き留めてみた。

2 自然の厳しさ

スウェーデンの長い歴史や文化（人々の生活や活動）を学ぶ時、出発点として地形や気候など自然を知ることが大切だと考える。この国の原点となるものは、国全体が高緯度に位置し、国土の三分の一以上が北極圏に属し、平地や耕地が少ないことである。従って「冬は厳寒の地湖や野山が凍るー山林や湖が多く耕地が少ないー食べ物がなくなるー飢え死にしまう」という現実的な事実・生き方が歴史を築いてきたといわれる。ホームステイ二日目にホストファミリーのベンクト父子、交流団員の松井さんと四人で探鳥に出かけた。そのとき見た海岸線（フィヨルド）



北欧特有のフィヨルドと岩山

は雄大であった。奥深くまで湾が入り組み、それを取り巻く土地は岩山（花崗岩と片麻岩？）や岩石が露出している。この岩山の上に民家が建てられている。また、針葉樹林を中心に、いくらかの広葉樹も育っている。国土の北部はスカンジナビア山脈のため土地の起伏が激しく、耕地には適さない。東部のバルト海沿岸のストックホルムやヘルシンキにかけては平地が広がり、湖の多い地形である。また内陸性の気候で、すでに雪が積もっていた。南部は平地で耕地が開けている。その上海洋性の気候で比較的暖かくスウェーデンの穀倉地帯でもある。



車窓からの雪景色

またこの地（イエテボリ）はデンマークに近いこともあり、ヨーロッパの歴史や文化の窓口としていち早く開けた都市でもある。

10月から翌年の4月にかけては寒く（ベングトさんの家では2月にマイナス25度以下になることもある）、日照時間が短くなる上に、曇りや雨の日、積雪も多くなる。約半年間は、太陽の日差しがあまりみられず、また太陽の高度が低いため日差しも弱く寒々としている（10月29日の太陽の南中高度約20度位、日照時間 5時間30分～6時間位）。この太陽、日照不足から精神的病（鬱病など）に罹る人もかなりいると聞く。1週間の滞在中（ウッデバラは、イエテボリから北へ約60km、ベングトさんの自宅は更に20km北にある）で終日の快晴は1日だけで、夜空の星の観察も一晩のみ可能であった。北極星が頭上に来て、天の川がきれいに見える。星は6等星まで見えるため、星の数が多すぎて星座も見つけにくい。有名なカシオペア座もよく見ないと確認できないほど星の数が多い。5月からの夏は晴れが続くが、気温が最高でも20度くらいであり、太陽の高度は低い。このような自然環境での衣食住の人間の営みは厳しいものがある。特に食に関しては、小麦やライ麦、ジャガイモなど畑作物中心。そして寒冷地でも育つ草地と酪農である。従って食材の種類は限られ、輸入に頼らざるを得ない現状でもある。今は南部の耕地で野菜などはかなり自給できるという。しかし日本のように温帯湿潤の気候では多くの種類の農作物が収穫できるが、ここスウェーデンではレパートリーの豊富な食物は難しい。8世紀頃からのバイキングの活動、19世紀初頭には多くの移民者を出したことも推察できる。

3 教育について

「教育」は、私が研修項目の第1番にあげていた課題であった。隣の国のフィンランドは、学力が世界1位の統計が出た。(PISA 2003における平均得点の国際比較)スウェーデンも高いたらうと考え、どのようになっているか興味があった。しかし私たちの訪問した週はちょうど1週間の秋休み中だった。従って、私たちより先に訪問している交換親善中学生の付き添いの先生からの話を参考に、見聞きしたことからまとめた。

- ・小学校校舎、中学校校舎が同じ敷地内に建っている。また郊外で家の少ない所では、民家と同じような学校が建っている。ここでは広い運動場は見られない。
- ・小中学校ともに1教室で30人前後の児童生徒を一人の先生が授業を行っている。(私が耳にしていたのは、小人数指導ではなく、複数の先生による授業形態)
- ・中学生は、オーストラリアについて調べ英語でまとめていた。
- ・小学生は、雨の日でもカッパを着て外で元気よく遊んでいる。また先生方もカッパを着て生徒と一緒に遊んだり、生徒の様子をみたりしている。
- ・日本の生徒が訪問したり、一緒に授業を受けたりしても特別に歓迎会などするわけでもなく(紹介のみ) 普段のままの授業であった。(日程上困難だったかもしれない)
- ・小学校2年生から英語を学んでいる。みんな美しくきれいな発音で英語を話す。スウェーデンの教育では授業料、給食費なども無料である。しかし何よりも素晴らしいのは学ぶ機会がいつでも誰にでもあること。色々な事情で退学しても、いつでも復学できる。例えば、5月1日は春の祭典「学生試験合格者歓迎の日」で、これから大学で学ぼうとする人、現在の大学生、すでに社会人となった人々が集まり行進を通して互いにたたえ合う温もりがある。

4 家庭教育と社会教育について

私は、時間と語学力不足のため、家庭教育と社会教育についての研修不足は歪めない。そんな中、ホームステイを通して感じたことをまとめてみたい。

家庭教育の原点は、親子の家庭におけるふれ合いである。この時間の確保は北欧ならではと思う。冬季は、日照時間が短く夜が長い。市内の商店街も開店が午前10時からで



ウッデバラ市のメイン通り

遅くとも午後6時には閉店する。寒くて暗い商店街では屋外では過ごせない。反対の夏季では日が長い。2か月の夏休みは、日光浴を求めて家族で別荘地などに移動する。ベングトさん一家も別荘を持ち、仲間と大きなボートも持つ。日本のように塾通いや、夜コンビニなどに集まる若者もいない。また、労働者の勤務地も国策では、できるだけ自宅から近距離を勧めている。従って親は午後5時から6時には自宅に帰る。その上、テレビの放送内容も日本のようにこれでもかこれでもかといった宣伝や深夜までの放送はないし、チャンネル数も少なく、人々はあまりテレビには関心がないようである。それよりもインターネット使用時間が多くなっているように思う。私の訪問した(夕方6時頃)ベングトさんの息子さんのご家族は、中学生がパソコンを、小学校2年生の弟がおもちゃで友人と遊んでいた。これからはインターネット使用などが読書離れを起し、学力低下を心配しているという話が聞けた。これは私が研修目標に掲げていたため、わざわざベングトさんの奥様が話し合いの場を設けてくれたもの。深謝です。

ヨーロッパの宗教はキリスト教である。この北欧においてもこの宗教が家庭にとけ込み、人間の心づくり、人間形成に役立っていると思われた。しかし私のホームステイからはこの影響が家庭にとけ込んでいたとは考えられなかった。現に私たちがウッデバラ市最古の教会に案内していただいた



グンボールさんの息子さん一家との触れ合い

時、次のような言葉が返ってきた。「最近教会に足を運ぶ人がいなくなり、このように無人となっている教会がとても多い。以前は日曜日などに多くの人々が教会に足を運びお祈りに来ていたが、今ではとても少なくなった。」ということである。

しかし、この教会の中で案内をして下さった方々やホストファミリーなど10人程賛美歌を披露してくれた。私たち9人も国歌「君が代」と「ふるさと」を歌った。この宗教離れをストックホルムでも聞いた。人々の生活が裕福になるにつれて、信仰心は薄くなり宗教離れが進むと言われている。日本も同じ傾向にあると実感した。賛美歌は、仏教に例えると読経だろうか。

ベングトさんの家庭では、長男がきちんと牧場を継いでいる。この長男の住まいは親から独立して、今はなき祖父母の家で生活している。築何十年を経ているか分からないが、部屋の中には祖父母などの写真が掛けられていたり家具類なども当時のまま保管さ

れたりしているのである。こうした環境から伝統や生き方を学んで行くのかもしれない。

ウッデバラ（スウェーデン全体も含むと思う）では、ある年齢が来ると子どもは親から離れていく。しかし、親が亡くなると子どもが親の家に入りそのまま引き継いでいくということが多いようである。ベングトさん一家も同様であった。

5 ホームステイから

私のホームステイ先は、ベングトさんグンボールさんご夫妻のお宅に4日間お世話になった。行政職員のご主人と市の議員をしておられる奥様であった。ベングトさんは15代目の後継ぎで牧場を経営しておられる。現在乳牛40頭と馬3頭を飼育している。現在は息子さんが後を継いで仕事に励んでいる。このあたりは起伏が激しく耕地に適さず、牧場として土地が活用されている。林を開墾して牧場にしたのであろう。お住まいの特徴は、平屋建てで花や樹木に囲まれた中にある。部屋には花や写真など多くのものが飾られている。写真は自分の親、子ども、孫などの写真である。自分の親の家もそのままであり、長男が住んでいる。また歩いて3分ほどの所に次男夫婦一家が暮らしている。ベングトさんの居間の照明は60wの俗に言う裸電球でこれに傘をぶせている。北欧の照明のステイタスは、間接照明であり、そしてキャンドルが多いことと言われる。ベングトさん次男のお宅に訪問した際の歓迎の照明は、多くのキャンドルとキャンドルの器であるガラスで明りや形を変えている。勿論どの家にも薪ストーブは利用される。寒い明け方に利用していた。どの家も窓には3～4灯の電灯が一晩中灯されている。

食事は、パン、肉、乳製品、トマトとキュウリであった。この時期のトマトとキュウリは輸入していると話された。ジャムや野菜などはかなり自給しているようである。220年のリンゴの木も有り、季節の果物として大切にされている。このベングトさんのお宅にお世話になりいろいろ学んだ。

- ・親や先祖から引き継いだものを大切にしている。数十年以上も使用している家具類や物も多い。70年前の椅子も見せていただき今も大切に使用している。
- ・先祖や親、兄弟、子どもや孫の写真を飾り家族愛が感じられる。
- ・テレビのチャンネル数も少なく、放送時間も短い。冬の夜は長い。こんな所から家族の会話やふれ合いが多くなる。今はパソコンと向き合う時間が増えつつある。
- ・家庭学習はない。午後10時頃には寝る。朝は6時起床で、7時朝食である。7時30分前後



おもてなしはキャンドルで

に出勤する。

- ・冬は長くまた夜も長い。家での過ごし方が大切になる。いつまでも飽きないインテリア（家具、照明など）を考えたとき、落ち着いた気品のある暮らしであったと思う。北欧の照明に対する考え方は、照明は暗いほど、キャンドルの明かりが多いほど高貴な生活と言われる。天井灯はなく、壁やスタンドによる照明である。

- ・この国は、50歳になると職場も含めまわりから祝福を受け（日本の還暦、米寿など）その時の記念品（日時計）がさくらの木の隣に設置されていた。またこじんまりとした国旗がいつも玄関に掲げられている。どの家も立派な掲揚塔があり、子どもの誕生日など家族にとって特別に祝福をするときに独特の旗が高く掲揚される。私たちが去るときも高く掲揚していただいた。こんな所にも家族や知人を気遣う習慣がある。



スウェーデンと日本の友好の国旗（市内）

- ・家庭は電気がエネルギー源であるが、電気製品を見ても日本のように流行を追うような物はない（例、テレビはサムスンで曲面ブラウン管）。以前、冬季は電気を輸入し、夏季はそれを輸出していたという。
- ・寒いときには薪ストーブを使用する。また窓ガラスが二重にはまり、建具も木製である。従って寒さをかなり和らげてくれているし、温かさを感じる。
- ・木は貴重品である。ベンクトさんのお宅も春先に木を伐採して売っている。この国は針葉樹が多く、パルプや製紙工業が盛んである。また寒い土地の樹木は、成長が遅いため、材質も堅くきれいな木肌をしている。普通用材になるまでは70年から100年の年月を必要とする。当然家具も手作りで年月が経つほど気品の高いものになっている。
- ・2か月ほど前に自家用車を購入された。アメリカ製のフォード車である。車はとてもシンプルでマニュアルミッション、窓の開閉も手動、勿論カーナビもない。言うなれば、このような付属品は必要ない国状でもある。しかし、キャンピングカーの牽引フックと電源をとるコンセントは常備されている。
- ・新聞は朝8時、郵便は10時に配達がある。但し、手紙を出したい場合、自分の郵便受けに入れておけば、郵便物は持って行って配達してくれる。これは集落が軒々としていて、遠いことなどが考えられる。ちなみに、現地からはがきが届く日数を

知るために送ってみた。航空便のはがきがウッデバラ市のホテルから自宅に届くまでの日数は1週間、ストックホルムのホテルからは10日間を要した。

6 環境政策について

環境の先進国と聞いていた。そこで環境保全に対してどのような工夫や市民意識が見られるか楽しみであった。

- ・市のゴミ処理場は、最新の設備を導入して余熱を利用している。施設の見学をした。
- ・家庭での排水は、浄化槽で処理して川に流しているようには見えなかった。(市の中心部は分からない) 食器などの洗い物は、食器洗い機で洗剤を使い自動で流している。またスーパーなどに行っても日本のように多くの種類の洗剤などが売られているとは思えなかった。ただ、生ゴミに関しては家畜の餌として利用されている。ゴミの分別も行われず、1週間に1度ゴミ収集車が自宅まで回収に来る。すべての物を焼却し、燃えない物は灰と区別されて炉より出てくる。



日本文化の紹介

- ・市の中心部や道路の土手などを見渡してもゴミが見あたらない。スーパーで売られている商品も日本のように加重包装などもなく、ましてやラップなどで包まれた食料品も見あたらない。商品の展示も日本のように工夫はなく、照明も暗い。私たちが購入した白菜も、少ししおれていて何日間店頭に並んでいるかわからなかった。食べてもさくさくとした歯ごたえがなかった。簡単に言えば生活そのものが簡素で無駄がない。

このように考えてみると、環境に対する特別な意識が強いというのではなく、生活そのものが環境に優しいということではないだろうか。広大な森林と多い湖。少ない人口である。従って人間の排出した物を自然が浄化してしまうのではと考えた。国土が狭く、人口が多く、物も多い日本では、この自然が浄化する能力を超えてしまっているのが現状ではないか。特に樹脂製品(樹脂袋、ペットボトル、トレイ)など石油関連の商品の人工のゴミが目につくが、これらは自然の力では浄化できないのが実情であろう。日本のスーパーと大きな違いである。日本は買い手の心を重視し、照明から野菜の一葉一葉まで細かいところまで気配りをする。しかしウッデバラのスーパーでは日本のような気配りがみられないような気がした。それは買い手と売り手が対等

の立場にあるという考えから来ているように感じられた。

- ・自然の樹木を家や町並みにうまく生かし、小鳥が自由に飛び交い、身近に観察することができる。ベンクトさんのお宅では、小鳥を見ながらの日々の生活である。
- ・樹木はこの国にとって貴重品である。従って計画的な伐採が行われているため、景観の素晴らしい市となっている。

7 福祉政策について

ウッデバラ市(人口約5万人)の予算が、23億クローナ(1クローナ15円、日本円345億円)、このうち社会福祉、高齢者ケアなどがしめる割合が8億クローナ(約120億円、35%)、国からの補助は5万クローナ(約75万円)、この国は財政面でも地方分権が徹底している。従って行政は、市税の増収を図るため住民を多くしたり企業を誘致したりすることに努力を払っている。

福祉の現状を案内の日本人などに聞いても話す人によって違っている。病院や福祉など手厚い保護を受けていることは話してくれたが、福祉にかかるお金は際限がないため、市としてはできるだけ福祉への出費を押さえたいということで自由に医者に診察してもらえないケースもあるという。また、老人福祉について在宅介護か施設介護かはお年寄り本人に任せるといふ。以前、スウェーデンは施設介護の方針で老人施設を多くつくった。しかし結果的に一人ひとりに合った介護が難しく、費用も建設費などでかかるため、結果的に在宅介護の方が費用、サービスとも良く、これが主流であると聞いていたので意外であった。

この福祉政策を考えるにあたって最も日本と違う点は、家族制度の考え方ではないだろうか。日本は親子の同居がまだ多く見受けられる。スウェーデンは、子どもの独立と男女平等の制度が根付いていること、これに基づいて、あらゆる個人は、まず労働者として健康で経済的に独立した存在であることが求められ、社会の最小単位は、家族から個人へ移行している。従って子どもは大学生や18歳になるころには親から独立して生活していく。同居という形式はないという。離婚やシングルマザーも多いと聞くが、経済的な自立があげられる。そして平等な税率と税の分配。職場は少なくとも男女の比率は6対4以上になるような努力をするよう法律



街中にとけ込むベビーカー

で決められている。

男女とも65歳まで働き、女性の就業率は80%を超している。例えば、女性の育児休暇は450日で、夫も30日の育児休暇を取らなければならないと法律で定めている。

スウェーデンの人々の平均寿命は、日本と世界1、2位を競う程までになっている。その原因を考えてみた。日本の平均寿命世界1位の原因は、優れた医療技術に負うところが大きいと考える。従って健康が害されて、病に罹っても進んだ医療技術で回復し、生きることができる。一方、ウッデバラの病院に勤める看護師さんの話では、ドイツから医者が来ているという。

こうしてみるとこのスウェーデンの長寿は、「生活ライフ」から来ている面が多いのではと思う。夏休み2か月、目先の利益にとらわれず、自然と共に生きる。老後まで保障された社会保障制度。そして人間が生きるための基本「労働と健康」政策。これが心身の本当の健康になっているのではと考える。私がお世話になったホストファミリーのベンクトさんは高血圧の薬を服用しているが、至っておおらかである。またウッデバラ市内やストックホルム市内の人々をみても肥満傾向の人々はさほど見受けなかった。

ウッデバラ市やストックホルム市を歩いて気づいたことは、ベビーカーを引いて歩いている親の姿、車いす姿を多く見かけたことである。ごく普通に街や人々ととけ込んでいる。この車いす生活者の場合、高校生などがアルバイトとしてこのように外に連れ出したり、食事の世話や買い物をしたりしている。

この社会福祉政策も通貨ユーロと同じようにEU国内に於いて統一したいという考えもあるようだ。本部はベルギーにあると聞くが、ここで決まったこと、話し合われたこととスウェーデンの伝統ある福祉との兼ね合いも問題になろう。この福祉政策で市の方が「遠路はるばる岡崎の地から、この国の福祉を勉強したいと熱心にウッデバラにこられた。それなのに福祉政策について不満を言う人もいる。少しは考えても



第二次世界大戦時の要塞

らいたいものだ」と話された。人間の欲望とこの福祉政策のあり方について考えさせられる言葉でもあった。また福祉政策を考えるにあたってこの国の歴史を考えてみた。この国は先の2つの世界大戦には巻き込まれず中立を保ったことである。これがヨーロッパのどの国よりも早くそして高度な民主国家を歩んだ原因と考えられる。中立と言ってもなぜか、市内の高台などに先の世界大戦の折、ドイツ軍を迎えた要塞が残されている。

次のテーマである移民政策を考える上で貴重な遺物として市民に語りかけているように感じた。

8 移民政策について

私の訪問の目的の一つに、移民者とスウェーデンの人々とどのように関わり合いながら生活しているかを知ることであった。1995年のEU加盟以後、アフリカからの移民が多いと聞いていた。これを実感したのは、日程最終日のストックホルム中央駅に到着したときである。黒人もかなり多い。またアジア系の人種も多い。ウッデバラにいたときには黒人はまばらな存在であった。しかし、市立図書館に行くとその移民が大きな社会問題になっていることを知った。まずウッデバラの人口の10～20%の移民が生活していること。この移民で特に問題になるのは人種、言葉、文化の違いによる壁である。この融和を図るために市でも色々なイベントを計画、学校でもナショナルデーを設けて児童生徒が一同に会して絆を深める活動を行っている。図書館に訪問した折、市内の学校給食担当者の会合を見ることができた。ガラス越しなので詳しくは分からなかった。

しかし、会議室には29の国旗が掲げられていた。29か国からこのウッデバラ市に移民してきていることが推測された。この移民問題で最も衝撃を受けたのは、難民の多いことである。ソマリア、ザンビアといったアフリカの国々からが多く、これらは政情不安、内戦などで命に支障があり住めない人々である。国籍、人種、歴史や文化の全く違うこうした人にも職と健康を与えなければならない。一番の犠牲者は子ども達である。出身地を聞いただけで終わってしまったが、もう少し子ども達と話をしたかった。



移民の子どもと共に

日本の外国人に対する制度は、就業ビザで働くことを目的としたものが圧倒的に多く、その子女に対しても就学義務を負わないことである。今回サブプライムローンから派生した金融危機で、日本における外国人労働者の様子を見れば明らかである。すぐに失業したり、自国に帰国したりする外国人も多い。しかし、スウェーデンは社会政策上、国民の労働と健康が重視され、移民者も同等に扱われるので労働と財政問題は深刻である。

難民が難民申請を行った場合の受け入れ率は、スウェーデンが圧倒的に多く56%、次はイギリスの30%強である。「EUは黄金郷」と言われ、年間50万人以上の不法

移民がいるといい、中でも社会福祉制度が整ったスウェーデンへの希望が多いという。残念ながら具体的な対策や現状など十分に聞くことができなかった。移民問題から分かったことは、EU諸国内における人々の往来は自由である。人々は豊かな国、住みやすい国を目指して人口移動が起こる。すなわち富のバランスがとれない限り、こうした問題は消えることはない。ましてや難民の発生する国々は民族紛争、富を求めた国内の主導権争いなどここにも富のアンバランスに起因すると考えられる問題が多い。

最近、EUの1つオランダでは国籍を取得する際、国によるオランダ語の検定があり、合格することが条件となっているという。また、ドイツでも移民をしてきた子ども達が言葉の壁に当たり、学校から逃避し社会問題になっている。どのEU諸国も移民や難民については大きな問題となっている。ウッデバラ市の方々も懸命に努力しているが、結局は有効な決め手はなく先の見えない問題と対峙している。

9 終わりに

今回の訪問に参加させていただき実に多くのことを学んだ。結論から言うと自分も含め生き方考え方、そして郷土への再認識である。スウェーデンのように社会政策が発展し、個人の命と尊厳が尊重される社会は、長い年月を掛けて築かれてきた。

私たち日本と比べて決定的に違うところが2つある。第1、スウェーデンは国民、住民一人ひとりの政治への関心が高いこと。選挙の投票率も80%以上と聞いている。すなわち住民が政治、行政を担っているという意識。女性の議員も半数を占める。人口も少なく、政策も小回りがきくこと。自分たちの生活のために自分の手で行政を変えてきたこと。そして行政は、住民一人ひとりが人間らしい幸せな一生を送る支援者であること。第2、生き方や考え方の転換である。日本は常に人々の生活に不安をあおり、世間の風潮も物質や金融の話題が中心になる経済至上主義的な風潮が強い。しかし、これからは「カネや物より知恵」で生きていくことへの発想の転換、工夫をしていくことが大切である。スウェーデンはこの生き方と考え方の知恵と転換に優れている。豊かさ世界1のスウェーデンから学ぶものは多い。人間の知恵は無限である。

これからの国や郷土を考えるにあたって大切なことは、決して世界の国々や人々をうらやまないことである。私たちは自然を上手に生かして生きてきた歴史と文化がある。先ず過去の歴史や文化に学び、その上にどう積み上げていくかが大切ではと思っている。



この親善・友好の思い出をいつまでも（友好の翼の方々と共に）

最後になりますが、この素晴らしい企画に参加できる機会を与えてくださった市役所関連部署の方々、ウッデバラ市長様を初め、お世話をくださった皆様、また、市から随行しお世話をいただいた廣山様はじめ団員として一緒いただいた皆様方に深く感謝いたします。

この受けたご厚意をこれからの国際交流活動や地域行政に市民の一人としていくらかでも貢献できるように努力していく所存です。誠にありがとうございました。

タック ソ ミュッケ！（ありがとうございました）

市民海外交流団報告書

窪田 三恵子

スウェーデン王国ウッデバラ市と岡崎市が、姉妹都市提携40周年を迎える本年市民海外交流団に参加できました事に感謝いたします。

10月26日午前9時市役所に集合し、セントレアへ 11時50分発フィンランド航空にてヘルシンキに15時過ぎに到着すると、気温は9度で寒く、外は薄暗くて、それからさらに、イエテボリまで飛びそこからバスでウッデバラに着きました。

イエテボリの空港では、ウッデバラ市役所の方が出迎えて下さり、市民海外交流団の自覚が少しめばえたのでした。

その夜ホテルの近くのレストランで軽い食事中、柴田市長が挨拶にいらっしゃいました。

10月27日(月)

旧市役所を表敬訪問

ボーフスレン博物館にて「岡崎市民の絵画展」オープニングの後、昼食会でホストと対面しました。

お父さんのリスト、お母さんのヤーナ、15歳の娘のユンナ、13歳の息子のマティス それに馬2頭、タイソンと言うオス犬が、ホストファミリーです。

ユンナは、フルートの合宿の為29日まで留守の為、この日は会えませんでした。

以前からの知り合いのような親しみに溢れた家族だなというのが第一印象でした。

ウッデバラ市主催の、夜の歓迎夕食会には、リスト、ヤーナ、マティス、と私が出席しましたが、その時、改めてお互いの事を良く知ることができました。この日は行事が朝から目白押しでとても忙しい一日だったのです。



歓迎夕食会にて

10月28日(火)

市役所の仕事について各担当の方々から、説明を受けました。

その中で私が興味を抱いたことは、22名の障害を持っている人達の仕事でありました。一つのグループでは、市内各地にコンテナを設置し、その中に市民から提供を受けた洋服を集めて、分類、洗濯、アイロンかけをし、値段を付けて販売、あるいは世界中の難民に送るという仕事をしていると言うことでありました。私の場合、古着は地域の廃品回収に出すしか方法がなくウッデバラのこの方法はとても良いアイデアだと思いました。

ヤーナの友達アントリエーナの40歳の誕生日パーティに行きました。

私を入れて8人の女性がチリ出身の女性の家で夕方5時過ぎに集まり祝いました。

それは、サプライズパーティで見ず知らずの私が、モールにいる彼女に声をかけることから始まりました。その後ヤーナの車に彼女に目隠しをして乗せ、会場の家に連れて行き、ナースのエプロンにナースの帽子をかぶせた後、目隠しを取り「サプライズ」と言う声から始まりました。

何故ナースの姿だったのかは、彼女は今ナースになる為、看護学校で勉強中だということでした。40歳で三人の子供(7歳、5歳、2歳)がいて感心させられました。

また、集まった女性達の出身は、スウェーデン、フィンランド、スイス、チリ、そして日本と、多国籍でありました。それぞれが料理を持ち寄り、ワインを飲みながら3時間大いにおしゃべりに花が咲きました。スウェーデン語がわからない私にヤーナが通訳をしてくれ、私も一緒に大いに笑い、とても楽しかったです。

帰りにチリ出身の女性が私にクリスマスのオーナメントをプレゼントしてくれました。最近スペイン語を習い始めた私は、「グラシアス」と言うのが精一杯でした。



サプライズ 誕生パーティーにて

10月29日(水)

市役所の方々の案内で観光。ウッデバラで一番古い教会は歴史を感じさせられ、今まで多くの教会を見学しましたが、これほど小さな教会ははじめてでした。

ランチの後、私は皆さんとお別れしヤーナとグルンドスンドを観光しました。

そこは、陸地が奥深く入り込んだフィヨルドを活かした別荘地帯でヨットハーバーがあり、冬の今は閑散としており、ほとんど人を見かけませんでした。

夏にはフィンランドやドイツなどヨーロッパ各地から観光客が押し寄せ、大変賑わう所でした。

そこから帰り道、小さなフェリーボートに二度乗りました。

5分くらい乗り無料でした。冬の季節あまり交通量が少ないにもかかわらず10台位乗ってきたということは、便利がいいのだなと思いました。



入り江の渡しであるフェリーボート

ヤーナが「私の夫にプレゼントに」とスウェーデンのお酒を買う為、酒屋と一緒に行了きました。

日本の場合、簡単に買えますがそうでないのです。まず鍵のかかった陳列棚から酒を選ぶとカードを取り、レジに行きお金と交換で商品が買えるという仕組みでした。これは未成年に酒を売らない為の方法だとか？

帰り道ユンナの通う乗馬スクールを見学しました。

学校の体育館位の大きさの屋内練習場で6歳～10歳位の少女8人が二人一組になり、小さな馬：ポニーに乗り一人は手綱を引き歩く練習をしていました。床には木のチップが敷き詰められていて糞は落ちてなくきれいでした。先生が姿勢について注意したとたん一人の少女が落馬！

少女は泣き出し練習は一時中断しました。晴れて暖かい日は、屋外で練習するそうです。保護者は高い所から見守り、その光景は教育熱心な日本のお母さんと同じです。厩舎では、少女が馬の蹄鉄の土を取り除いており、世話をする事も重要な学習なのです。

ユンナが先週の日曜日からフルートの練習で合宿している隣町に、夜8時過ぎ、ヤーナと私でユンナを迎えにいきました。

そこは、山小屋風の小さなコンサートホールでした。私たちが着いたときは男性がピアノの伴奏付きでレッスンしており、その音色は澄んできれいでした。彼の腕前は勿論のこと、このホールの音響がいいせいもあるのかなと思いました。

帰宅してから、ユンナの演奏を聞かせてもらいました。新しく買ってもらったフルートを彼女はとても気に入っているとのことでした。そのフルートは日本製の有名な楽器メーカーのものでした。8歳から今まで7年間レッスンしてきた彼女はとても上手でした。そこで、私は日本の曲「さくら」を、彼女に演奏してもらおうと思いつきました。その夜は、彼女は大変疲れており夜も更けていたので、明日ということにしました。

10月30日(木)

市役所の方々の案内で、世界遺産「ターヌムの岩絵」を訪れました。

青銅器時代から現代に発信する大胆な造形として、1994年世界遺産に登録される。

ノルウェーとの国境近くのオスロ湾に面したターヌム村から、およそ2500年前の青銅器時代に描かれた岩絵がいくつも見ついている。ノルウェーのアルタにも同様な岩絵があるが、ターヌムの方が時代が新しいだけに様式的で、芸術性が高いと言える。そりや船といった日常の道具、槍を持った男、太陽のような円や股間に球体を持つ女性。子供を宿す女性は豊穡祈願のシンボルとして、かつ自然に対する畏怖として描かれるのだろう。モダンアートに通じる世界である。

2500年前の岩絵のいくつかは今も認識しやすくとても感動的でした。秋休み中のユンナとマティスも同行し、ここを訪れるのは、初めてとのことでした。

この日の、帰宅は、4時過ぎになり外は薄暗くなりましたが、始めの予定通り馬に、乗ることにしました。名前は、バンバ、雄のポニーです。まずバンバと仲良くなるため、ブラシを体にかけて、「宜しく」と、頭を撫でて挨拶をしてから、乗りました。思ったより高くて初めのうちは、少し怖かったですが、楽しかったです。

最後の夜のディナーは、私が作る事にしました。日本の代表的な料理は、寿司ですが、ティーンエイジャーが二人いる家庭の為、カレーライスにしました。カレールーとレトルトのごはんを日本から持ち込み、牛肉、野菜はスーパーマーケットで買いました。ヤーナとリストが手伝ってくれ、三人でワイワイ言いながらとても楽しくできました。サラダは、リストが先日作ってくれた、野菜の中にチーズ、くるみ、レーズンが入りスパイスだけで

味付けしたものを、添えました。カレーは、たくさん作りお鍋に残りましたが、皆おかわりしてくれ「初めて食べたけど美味しいです」と言ってくれました。カレー味は知っており、でもカレーライスは、初めてだそうです。

夕食の後、ユンナに「さくら」を演奏してもらうので、私がハミングしながらスコアを書くのと彼女は曲の理解ができたらしく、初めてとは思えないほど素敵に演奏してくれました。「さくら」は、スローテンポで簡単な曲ですが、それゆえに、難しいのです。

その後、ヤーナと私は、夜遅くまでおしゃべりしました。思春期の娘を持つ母として、いろいろ悩みはあるようでした。

10月31日(金)

お別れの朝です。皆で朝食をいただき、サンキュウカードを渡したところ、ヤーナが、心のこもったプレゼントを夫と私にくださいました。彼女の手作りの物もありました。もう一度お礼の言葉を言い、お別れをしました。見知らぬ国の私を、暖かくホームステイに受け入れてくださり、短期間、多くの事を体験させて下さり、感謝の気持ちでいっぱいでした。初めて訪れた国でしたが、ホームステイしたことで、充実した6日間を過ごせたと思います。

貴重な体験をさせて頂きました、岡崎市、岡崎市国際交流協会、お世話になりました皆様にお礼を申し上げますとともに、今後も交流が続きますことを、願っております。

ウッデバラでお会いした人たち

佐藤 京子

この度、岡崎市の国際交流事業の一環である姉妹都市交流の旅に参加させていただきました。市長さん、そして事務局の皆さん、本当に有難うございました。

最初は、北欧への憧れ、そしてこの際、何でも見て経験してみたいという”野次馬“的な気持ちで参加したのですが、現地に行き、そして様々な公式行事に出席させていただき、またウッデバラの人たちにお会いしているうちに、これは大変なことになったと、緊張感で一杯になってしまいました。

特に今回の交流は、ウッデバラとの姉妹都市 40 周年の記念行事で、公式行事では、両市の市長さんのスピーチや記念品の交換が行われました。

私達は、午前中の交換会に続き、博物館の絵画展及び岡崎市が贈呈した雪見灯籠の除幕式、夜は公式の夕食会に出席させていただきました。

ウッデバラの関係者やお世話をしてくださった皆様がとても気使いをしてくださり、どの行事も温かな雰囲気の中で、和やかに過ごすことができました。

夕食会の会場では、岡崎市の中学生の皆さんのパフォーマンスがとても素晴らしく、堂々とした彼らの様子には、岡崎市民として誇らしく思いました。

厳粛、緊張、リラックス、そして感動へと目まぐるしく変化した1週間でしたが、私の人生の貴重な体験となり、帰国後、ウッデバラを思い出し、“幸せ”に浸っております。

公式事業は勿論ですが、市民レベルでの交流についても素晴らしい体験をさせていただきましたが、私の心に残ったウッデバラの人々について報告させていただきます。

Mr. Kjell Valuret

シーシェルは私がホームステイさせていただいた家のご主人です。

彼は元中学校の校長先生で、長身の優しい方でした。

レセプションにも出席されていたようですが、誰がシーシェルなのかが分から



本棚の前で

ず、会場から町の博物館に行く路上で教えていただき、思い切って自己紹介をしました。たどたどしい英語で、しかも緊張して自己紹介をしましたが、その緊張感がホット取れるように気さくに応じてくれました。そして、博物館では私が分かるよう優しい単語を使ってゆっくり説明してくれました。

また、その日の夕食会でもお互いの家族のことや日本、スウェーデンのことなど、色々とお話（時々話が通じないことがありましたが）をさせていただき、緊張もとれ、気持ちが打ち解けて、その後のシーシェル宅でのホームステイも安心して過ごすことができました。

彼は、以前校長先生をしていたこともあり、特に若い人に対する思いが強い人のようでした。

私達がお宅でお世話になっている時、彼は半日ほど陪審員として裁判所に出かけていきました。彼からは事件の内容については詳しくは説明されませんでした。若者が関係した事件のようで、帰宅後、「わずかな罰金ですんでよかった。」と言って喜んでおりました。一方で、若者が関係する事件が最近増えてきていると言って、嘆いておりました。これまで子供に接してきた経験から、特に青少年の非行には、感心が深いようでした。

彼の居間は、壁一面が本棚になっており、実に様々な本が置いてありました。また、廊下や他の部屋の本が一杯納められており、すごい勉強家のようでした。彼の話の端々には、恵まれない人に対する思いやりの言葉が多くありました。特に、アフリカからの難民、移民については、スウェーデンでも社会問題になってきているようで、そのことについての話も多かったようです。

ウッデバラ市役所の方の案内でシーシェル達と市立図書館に行った時のことです。

図書館は、移民や難民の人たちが多く住むところに立地されており、それらの人達に言葉や生活習慣などについて講習しているとのことでしたが、図書館の方からこれらの人達に対する教育の内容・方法について説明されました。

その図書館からの帰り道で、私達は地元で10代の若者4～5名に「どこの国から来たのか」など話しかけ、その後一緒に写真を撮るなどの交流も行いました。ほんの僅かな時間の交流でしたが、彼は、そのことがとても嬉しかったようで、帰宅後も、話題の中心は若者に関することでした。話している際の、彼の穏やかな様子を見て、彼は、心底若者のことを気にしているのだな、と思いました。

また、彼は、私達が帰国する前日から、スカンジナビアの国際交流の会に出かけていきました。彼はそういった国際交流にもとても熱心で、これまでの私の周りでは会ったことのないタイプの尊敬すべき人でした。

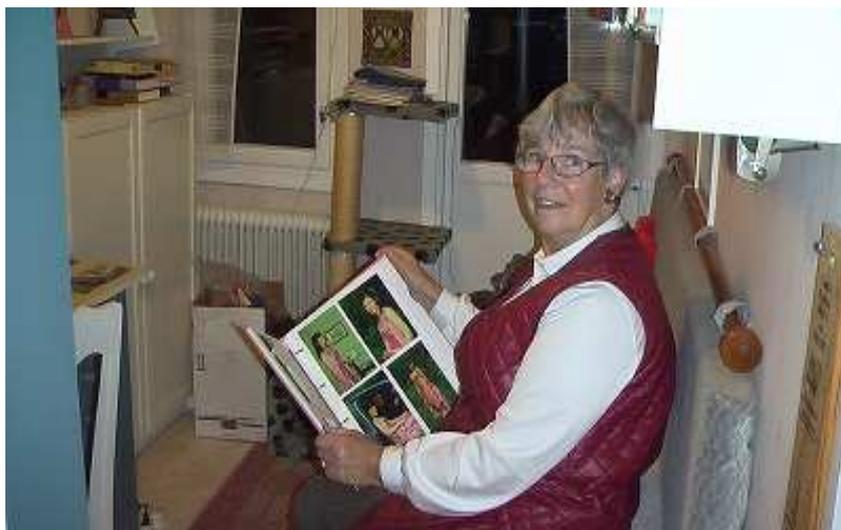
Mrs. Valborg Valuret

Kjellの奥様です。彼女には、公式行事のあった日の昼食会で初めて会いました。

シーシェル同様本当に気さくな婦人で、打ち解けて話をすることが出来ました。彼女は、73歳で、5人の子供を育てた肝っ玉母さんであり、また、夕食会にはかわいらしいスウェーデンの民族衣装を着たりする愛らしい感じの婦人でした。

お母様はイギリス人とのことで、今も多くの親戚がイギリスに住んでいて、紅茶を愛し、古いものを大切にす、イギリスの伝統を持った婦人でした。

ご自宅に連れて行っていただいた時は、もう日が暮れており建物の外観は良く分かりませんが、家の中は非常によく整理されており、落ち着いた雰囲気が感じられました。



エネルギーが豊富なご婦人

翌朝、彼女の自慢の庭を拝見させていただきました。ご自宅は、約80年前にご両親が建てた家を増築したとのことで、外観も実に a t home な感じの家でした。ウッデバラの訪問は冬の始まりのという時期のため、庭の花は少なかったのですが、日本では見られない様々な種類の植物が植えられておりました。訪問時期が、春か夏ならこの落ち着いた家の周りや庭には、実に美しい花が咲いていることだろうと、思い浮かべながら話を聞いておりました。

ご夫婦は、とても先祖・家族を大切にしており、自宅には家族のミュージアムとも言える部屋があり、ご両親や友人の写真、古い道具、本、おもちゃなど、本当に沢山の思い出の品を保管しており、しかも彼女は一点ごとの経歴を良く覚えていました。私達のプレゼントもこのミュージアムに飾られ、姉妹都市岡崎市との交流が彼女、そしてその子供に引き継がれると嬉しいのですが。

彼女にもシーシェルと同様に沢山の蔵書があり、話の中で分からないことが出てくると辞書や地図、図鑑などを直ぐに持ってきて調べます。そして私達の細かい質問に対しても嫌な顔をせず、熱心に答えてくれました。時には私の持参した電子辞書でスペルを教えてくれたり、又、時にはご自分の辞書などを取り出して説明してくれ、その様子はとても70歳をこしたとは思えないエネルギーが豊富なご婦人でした。

お二人は、シーシェル16歳、バルボルグ15歳の時に知り合い、それぞれ20歳、19歳で結婚し、三年前に金婚式を迎えたとのことでした。5人の子供と7人の孫がいるとのこと、一番下の息子さんを除きいずれも近くに住んでいて、私達は4女のマリッカさんの新しい家に連れて行ってもらいました。海を見渡せる丘の上に建つ、とても素晴らしい家でした。

彼らは熱心なカソリック信者で、毎日曜日には教会に行き、(スウェーデンでも若い人は殆ど教会に行かないとのこと) また、教会のチャリティー行事などにも積極的に参加し、古着などを提供しているとのことでした。

後日、私達が連れて行ってもらった教会はその地域では最も歴史のある教会でこじんまりとして簡素でとてもかわいい教会でした。そこで、教会の歴史などの説明の後で、各ホストファミリーの人達、教会の案内の人達、市役所の人達で、賛美歌を歌ってくれました。そのときのシーシェルの歌声は素晴らしく、バルボルグさんが自慢するだけのことはあると納得しました。

私達もお礼に「君が代」と「ふるさと」を歌いましたが、歌の上手い下手は別にして、歌を通じてその場はとても和やかな雰囲気になりました。

Mrs . Agnetha Riddar

私がウッデバラでお会いした人の中でもう一人印象を受けた人を紹介します。その女性の名前は、アグネタです。彼女は、市役所の広報担当部局に勤務する方だと思いますが、私達がイエテボリ空港に着いた時からウッデバラを離れる時まで面倒見てくれました。

根っからの明るい人のようで、図書館、リハビリセンター、海岸地帯への小旅行など色々なところに見学に行きましたが、見学地の内容を私達に理解させようと、懸命に説明してくれました。通訳の方が、上手く日本語に訳せない時も、何度も何度も説明を繰り返して、私達に理解させようと努力してくれました。

彼女は実に色々な国々に旅行していて、南アフリカ、インド、オーストラリア等の話が聞けて、本当に面白い人でした。

彼女の笑顔はとても魅力的で、大きな声で話し、大きな声を出して笑い、一方、暗い話の時は顔を曇らせる、スウェーデンで会った人達の中では際立って表情豊かな人でした。彼女には本当にお世話になりました。とても感謝しています。

スウェーデンに行ったら、この機会に評判の医療制度についても勉強したいと思っておりました。機会を見つけて色々な人に尋ねてみたのですが、残念ながら、それぞれの方の説明が違っていたり、また詳しくは分からないと言う返事でした。今思えば、市役所か薬局などに思い切って訪問し、聞くべきだったと反省しております。1週間の旅では、無理な願望であったのかも知れません。これは、これからの私の課題ということにします。

今回の交流事業に参加させていただき、実に様々な人達に会う機会に恵まれました。たくさんお話が出来た人、少ししかお話が出来なかった人、拝見だけしか出来なかった人など、様々でした。しかしいずれの方も、実に親切で心優しさを漂わせた方ばかりでした。

私達の滞在が両市の交流事業にどの程度お役に立ったか分かりませんが、今“それなりによく頑張った”と思っております。岡崎市のこの交流事業に参加させていただいたことは、自分自身の交流事業のスタートだと思っております。

バルブレッド夫妻やウッデバラ市役所のアグネタを目指して、“さー頑張ろう！”

最後にスウェーデンでお世話になったウッデバラ市役所の皆様、バルブレッド夫妻、国際交流の旅に同行していただいた岡崎市役所の廣山様、太田様を始めとする国際交流担当の皆様にご心より感謝申し上げます。

唯一覚えたスウェーデン語で一言“Tack sa^mycket” ありがとうございました。



Tack sa^mycket!

タック ソ ミュッケ!

松井 弘

はじめに

今年4月から、「特定非営利活動法人 踏の臺」で、医療的ケアの出来る障害者施設の建設を目指す活動を始めたが、障害者に対する市民の皆さんの理解や関心は低く、障害者施設建設の意義を理解し協力して頂ける様なヒントを、高福祉国家と言われるスウェーデンで見つきたい、そして街の美しい景観から環境問題を考えてみたいという思いが、応募の動機だった。

また、なかなか経験する事が出来ない岡崎市民を代表(?)して、姉妹都市提携40周年記念行事に参列出来るという事にも魅力があった。

姉妹都市提携40周年記念行事に参列

- 10月27日 市議会議長と執行委員長(市長職)表敬訪問
(市代表団、市民海外交流団、友好の翼)
岡崎市民の絵画展オ・プニングセレモニ -
(市代表団、市民海外交流団、友好の翼、中学生)
贈呈した雪見灯籠除幕式
(市代表団、市民海外交流団、友好の翼、中学生)
ウッデバラ市主催 歓迎夕食会
(市代表団、市民海外交流団、友好の翼、中学生)

スウェーデン(ウッデバラ市)の障害者福祉について

ウッデバラ市社会福祉課長のアニカ・ノーレンさんの説明を聞き、質問し、更に分からない事はメールでお尋ねした。本で調べた事を中心に取りまとめたみたが、私の語学力のレベルや思い違い・勘違いで間違いがあるかも知れない。



1 歴史的背景

スウェーデンが中立主義を確立し、国内

スウェーデンの障害者福祉について

経済を自前で建設する事により国民生活の向上を目指し始めた頃の生活は、貧しい農業国であった。

1850年～1930年の間人口の2割に当たる100万人以上の若者が主としてアメリカに職を求め移住し「移民の時代」と言われていた。スウェーデンでは、19世紀後半に産業革命が始まり、ダイナマイトを発明したノベルの様な発明家を多数輩出し、旺盛な企業家精神の下で事業化し、ボルボやサプといった有名企業が次々と産声を上げる時代が始まった。都市に出た農民は長時間・低賃金と劣悪な労働環境の中、労働争議も多発し、活発な労働組合運動が起こり、社会主義理論が普及して行った時代であった。

1889年「企業が本来もつ企業家精神とそれに基づく活発な経済活動を出るだけ阻害させることなく、経済全体の成長発展を確保し、合わせて国民一般の生活の質の向上に向けて公平、公正、平等、機会均等などの普遍的価値を追求すること」を理想とした社会民主労働党が誕生した。

1920年政権を担当した社会民主労働党は、経済発展の成果を社会の公平、公正、平等、機会均等などの普遍的価値の下で国民一般に出来る限り広く享受させ、生活の質の向上に寄与させようとする政策を基本に置き、それを実現していく上で、公共部門の提供するサービス水準を拡大して大きな政府を目指すしかないと考えた。そして社会民主労働党が3代に亘り政権を担当した1920年～1969年、特に未曾有の経済的発展を実現した後半の60年代は黄金の60年代と呼ばれ、福祉国家と言われる社会が実現した。

参考

・人口など

	人口	市議会議員	市の職員
ウッデバラ市	約5万人	61人	約5千人
岡崎市	約38万人	40人	約3千人

* ウッデバラ市は、市議会議員15名で執行委員会を組織し、執行委員長が市長職を務める

・ウッデバラ市の予算 345億円 この内福祉予算 120億円(35%)

・国民負担率(対国民所得費)

	租税負担率	社会保障負担率	合計
スウェーデン	51.5%	19.2%	70.7%
日本	25.1%	15.0%	40.1%

・スウェーデンの使用者負担の社会保険料・・・ 33%

2 障害とは

障害は各個人に問題があると思われていたが、スウェーデンにおいては1960年代になって平等問題および人権についての意識が深まると同時に、障害を周りの環境の中で理解しようとする動きが深まり、1972年に障害者団体はこの方向性をプログラムに「障害とは各個人に属する損傷や病気などの属性ではなく、この損傷や病気とその個人の環境との間の関係」と明記した。この様に定義すれば、心身機能に障害があっても社会的環境を整えばそれは障害にならない。反対に、環境が整わなければ誰でもが障害者になり得るのである。環境とは、個人の生活の物理的側面の事を指し、意識的、計画的に変えられるものである。

3 障害者福祉に関する法律

社会サ - ビス法・保険医療法・LSS法・LAS法の4法

社会サ - ビス法

児童福祉・母子福祉・生活保護・障害者福祉・高齢者福祉などにおける基本法で、福祉における目的・原則・住民の権利・行政の義務などが書かれている。また権利法であるので、その決定に対しては不服訴訟を起す事が出来る。

保険医療法

住民の健康促進を図り、住民の経済状態、居住地区に関わりなく、十分医療が等しく受けられ、住民の総合的なニーズに基づいた保健、医療の拡充と組織化を図る事を求めている。義務法なので、不服審査は出来ない。

LSS法（特定の機能障害者に対する援助、サ - ビス法）

重度障害者に更に権利を与える法律

- ・ パ - ソナルアシスタント
本人の手足となる人
- ・ ガイドヘルパ -
外出時に付き添う人
- ・ コンタクトパ - ソン
障害者の日常生活の助言を行ったり、孤独にならないために社会生活に参加する事を援助する人
- ・ 臨時ヘルパ -
障害者の両親の介護を軽減するために、一時的あるいは定期的に両親の代わりに介護を行う人
- ・ ショ - トステイ
障害者がレクリエ - ションに参加したり、介護者が休息出来る様に定期的あるいは緊急的にショ - トステイを利用出来る

- ・ 12歳以上の障害児に対する学童保育
 - 12歳以上の障害児を、登校前後および休暇中世話をする
- ・ 青少年のための里親あるいはケア付き住居
 - 家族と同居出来ない児童、青少年が里親あるいはケア付き住居に住む事が出来る
- ・ 成人のためのケア付き住居
 - ケア付住宅（サ - ビスホ - ムかグル - プホ - ム）に住むことが出来る
- ・ ディケア
 - 就労あるいは就学していない障害者は、ディケアを受けることが出来る

LASS法（アシスタント補償法）

パ - ソナルアシスタントによる介助時間が週に20時間以上の場合、この法律により社会保険庁によって決定される。重度身体障害者からヘルパ - が何人も代わる、ヘルパ - を選べないという批判が出ていたためアシスタント補償法により介護を受けている人が自分に適したヘルパ - を選んで市に雇用してもらう事も、あるいは自分で雇用する事も出来る。

4 施設について

在宅介護を基本としている。

在宅サ - ビス

- ・ ホ - ムヘルプサ - ビス
 - 掃除、買い物などの家事援助や就寝介助、入浴介助などの個人介護で、自立生活を援助する
- ・ 準夜パトロ - ル、ナイトパトロ - ル
 - 夕方から朝にかけてヘルパ - 、介護保健士が要介護者を回ったり、緊急の呼出しに応じる制度
- ・ 訪問介護
 - 介護が必要な人が、自宅に住み続けられる様に看護師あるいは介護保健士などが定期的に訪問する制度
- ・ アラ - ム電話
 - 安心電話とも呼ばれ、一人暮らしの要介護者になにかあった場合、呼び出しボタンを押すとアラ - ムセンタ - と会話出来る
- ・ 移送サ - ビス
 - 身体機能に低下や障害などのために、普通の公共交通機関が利用出来ない人が、タクシ - や車椅子用のミニバスを利用する制度
- ・ 住宅改修補助

自宅で自立した生活ができる様に必要な住宅の改造を行う

- ・ディケア
- ・ショ - トステイ
- ・補助器具の貸与

施設として、

- ・サ - ビスハウス

ケア付アパートで、各人の居住部分には台所等が付き、食堂、集会所等の共同利用施設も設置されている。介護等に当たる十分な人数の職員が配置され、24時間体制で勤務している。

- ・グル - プホ - ム

介護が必要な人が職員の援助を受けながら、少人数で共同生活を送れる介護・住居形態で、居住者の居室と共有スペースがあり、職員は24時間勤務している。

ウッデバラ市には、23のホ - ムがあり、5人のスタッフがそれぞれに常駐している。

この日(28日)の午後、ディケア中心のホスピタル(病院)の見学があったが、私はホストファミリー - と別行動をしたので、見学出来なかった。

見学された方によると、ディケア中心のホスピタル(病院)で2棟の内、奥の建物には短期(2~3ヶ月)の入院と長期の入院の必要な方の施設があった。中の見学は出来なかったが、合わせて100名程度収容可能との事。手前の建物はディケア中心で理学療法士2名、作業療法士2名で各10人ほどの患者を見ていた。(各療法士には助手もついている)

週に2回とか3回と時間を決めて、各個人のハビリスケジュールに基きケアトレーニングしている。ちょうど行った時は、元ボルボで働いていたという脳溢血で倒れた81歳の男性の右足のリハビリ中だった。

足首に重りを巻いてベッドに座り右左交互に足を上げて機能回復のトレーニングをしていた。また別の部屋では、年配の男女の方が機織りをしていた。手と足を使つての機能訓練だ。別のスペースでは、ゲームが出来るようにマ - ジャン、オセロなどの遊戯テーブルが置いてあった。中庭には花壇があり、一部屋根付きで機能訓練のために、わざと傾斜がつけてあった。通常はおおむ



ケアトレーニング

ね10時から15時半までやっており、送り迎えには専用のタクシーがある。スウェーデンでの介護は自宅介護が中心だ。

帰っても一人暮らしをしている人達らしいと聞き、それが印象的だった。子供が独立したら別世帯で、それぞれ独立心が旺盛だということの表れだと思い、そういう生活をサポートする仕組みがあることを知った。

5 社会扶助を受ける権利（最低生活保障制度）・・・社会サービス法より

- ・ 個人は、生計のために（生計費補助）また、その他の生活諸費用のために（他の援助）、当事者のニーズを充足する途が他に見当たらない時は、社会サービス当局から社会扶助を受ける権利を有する。
- ・ 個人は、社会扶助によって、合理的な生活水準を確保出来る。社会扶助は、自律的な生活を送るために当事者の利用出来る資源を強固にする観点から算定される。
- ・ 生計費補助は、次の諸費用に関して支給される。
 - 食費、衣服、靴、遊び、余暇、消費財、保健、衛生、日刊紙、電話、テレビ視聴料、その他の諸費用
 - 住居費、家庭用電気代、地域での交通費、眼鏡代、労働組合費、失業保険料

6 感じたこと、思ったこと

スウェーデンの高福祉は、豊かな緑の保存、快適な散歩道、生活環境、男女差別の克服、女性の労働化率の向上、移民政策、労働者保護政策、教育や保育など生活の質の向上の施策も含んでいるという。生活の質の向上のために高負担しなければならない事を国民は納得している。そこには福祉の享受が出来るという国民の安心感がある。高負担をしても貯金という考え方で、満期（65歳）になると間違いなく還ってくるもので生活出来るという安心感がある。毎月手取り額の可処分所得額全てが生活費に充てる事が出来る。

また世界で初めてオンブズマン制度を導入したこの国の政治は、透明性が高い。情報が公開され、国民はいつでも知る事が出来る社会だ。

納税もしかり、支払側が住民登録番号で税務庁に報告、本人はそれを確認するだけで納税申告終わりという所得隠しがないシンプルな制度だ。

最初に、「人が大切、人が全て。その人に必要なことはサポートする。このことが福祉の基本です」と言われた。健常者は高卒後（18歳）独立して生計を立てるが、障害者でも20歳で自立出来る様に、生活出来るという安心感がある社会だ。

障害者政策国家行動計画にも盛り込まれている。

- ・多様性を基本とした社会的共同
- ・全ての年齢層の障害者が完全に社会参加できる社会建設
- ・障害を持った女性、男性の生活条件の平等化
- ・現在の公共性のある建物や公共建築物などは2010年までに障害者がアクセスできるようにする
- ・障害者オンブズマンの機能を増やし、バリアフリーセンターも兼ねること
- ・公共交通なども障害者が2010年までにアクセスできるようにする

それが安らぎを産んでいるのだ。時間の流れがゆったりしている。

たくさんの車椅子の方が外出している。大きな空気入りのタイヤの乳母車での親子連れが沢山見かけられる。そういう人たちが町に出かけることが出来るインフラの整備がしっかりあるからだ。それが多目的トイレであったり、人の何げない気遣いであったり。



多目的トイレ

私たちの「特定非営利活動法人 路の臺」も、まず障害者の存在を自分たちの活動で知って頂くことが最初の一步だと思った。そして理解して頂く事に繋げる事だと思った。

「ウッデバラ市に来た人すべてが私たちのお客様、市民であろうとなかろうと、スウェーデン王国の国民であろうとなかろうと、それは問題ではありません。

自分の住む町が良い所であれば、人が、企業が集まって来ることにより収入が増えます。収入が増えれば、更により良いサービスが提供出来る様になります」と広報担当のアグネタさんは言う。

バスタ - ミナルのトイレに入った。ガイドの方から、公共施設は無料トイレですとの話を聞いていたが有料トイレに入ってしまったようだ。全部個室でドアを開けようとしても開かない。ロックされている。要領がわからないままガタガタとやっているとき若い女性の方が飛んできて、さり気なくロックを解除して「プリ - ズ」と言って立ち去って

いかれた。こんな気遣いが街に溢れているのだろう。彼女の行動がトイレに入れないと
いう私の障害を取り除いてくれた。心のバリアフリ - だ。有難かった。

環境

町の景観 旧中心市街地の建物は4階
建までの落ち着いた佇まい
で、石畳がより落ち着きを
増していた。

ゴミ ポイ捨ては見当たらない。
歩きながらタバコを吸う人
はいない。

岡崎でよく見られる道路や
中央分離帯にもゴミはない。
景観もそうだがクリ - ンな
町だ。

交通マナ - 自動車専用道路もあり、車の
流れはゆったりとしている。
誰もが先を急ぐような運転
ではない。横断歩道でも歩行
者は見守られている。

自転車専用道路、歩行者専用道路のほか動物が横断出来る地下道もある。全てに優しい。滞在中クラクションの音は聞かなかった。満車の駐車場でも障害者用スペ - スに駐車する車はなかった。

公共駐車場 4時間まで無料の公共駐車場があちこちにある。市の中心部への車乗り入れを禁止しているようでもなさそうだが、街中は歩く人ばかり。安心して歩ける。自転車も、歩道に設置された自転車置き場に止められていた。

路線バス 多くの路線があり、乗客も多い。利便性が高いのだろう。バス停もたくさんある。車で20分ほどの所を利用してみた。運転手さんは乗り降りする一人一人に声を掛けていた。人の繋がりを感じた。車椅子の人が利用で出来る装置が付いた車両もある。

街路灯 岡崎に比べ街路灯の数は少なく暗い。でも不便さは感じない。
岡崎のみならず日本は明るすぎ、資源の無駄だと感じる。

エネルギー - のインフラ ウッデバラ市ではエネルギー - は電気。稼動したばかりのエネルギー - 供給会社では、家庭から出るゴミを燃やし、蒸気



町の景観



石畳の道

を熱源や発電に利用。各家庭でも電気と暖房用の薪。家の中は3重の窓ガラスで22～3℃になっていた。トイレの水も温められていた。(最低気温は-25℃)

青山さんと二人でお世話になりましたホストファミリー -

環境



お世話になりました

大規模土地所有農家。牧場の中央に母屋、倉庫、家畜小屋などの一連の建物がまとまって一家を形成する農家コンプレックスという典型的な散居村の形態。ベンクトさんの母屋は100年以上前の父の家。現在は長男(孫)が住む。2階は当時のままで、家具も手作りのものがそのまま有った。古い大きな柱時計が2つ壁に架かっていたのが印象的だった。

毎朝3頭の鹿が牧場を横切って行った。

市の中心地より西に20km(車で20分足らず)の、海岸に近い大きな牧場だった。

ご主人 ベンクト・リンドベルグ さん

引退したが15代目の牧場主で、元農学校の校長先生。

大きなお腹をした大男、気は優しく力持ちの感じで家事も積極的に行う。

サヨナラパーティでは牛肉の串焼きをご馳走して下さり、英語が苦手な私には米語の辞書を持って、いつも隣に居て、4日間フルに付き合ってもらった。

森林を馬で開墾し牧場を造る様子を映した50年前のカラ - の8mmを見ながら、開墾時代の事を教えて下さったり、スウェ - デンの歴史、ウッデバラ市の大火についてもお話しして頂いた。

奥さん グンボ - ル さん
市議会議員。

3日間(1日は公務?)付き合っ
て下さる。きれいな発音の英語で
ゆっくりと話しかけて頂いた。

220年のリンゴの樹が庭にあ
る。その実で作ったジャムは甘さ
が抑えられた絶品の味。毎朝、コ
- ンフレ - クやムスリにたっぷ
りとかけて頂いた。



ホストファミリーと一緒に

長男 ジョハン さん

16代目。乳牛40頭と馬3頭の牧場を1人で切り回している。春になると肉用の牛を預かり秋に返す。冬は樹木を伐採し、春に引き出し燃料の薪として売却する。

私が持っている鳥図鑑と同じ英訳版の図鑑を用意して、半日バ - ドウォッチングの案内をして頂いた。もう一つの趣味は馬のロデオ。専用の馬場を持っている。

小学3年生から習ったという綺麗な発音の英語を話す。

私たちが帰った3日後、寒くなり、放牧を止め牛舎に入れたとのメ - ルを頂いた。

ブラッキィ - 8歳の雌のニューファンランドッグといわれる海難救助犬。

55kgの大きな長い毛の黒いおとなしい犬。

私たちに吠えることはなかった。

ミッサン 部分的に白いところがある黒色のネコ。可愛くこれまたおとなしい。

フラッグ 高さ10mぐらいの立派なポール。家族の誕生日とか記念日や来客があると国旗に良く似たデザインの細長い三角形の旗を掲げる。私たちの滞在中ずっと掲げてあった。

鳥の餌台 食堂の窓から数メートルの所にある。ゴジュウカラやキツツキの仲間のアカゲラがくる。鳥見人にとった垂涎の場所だ。

窓辺 鉢植の花やキャンドル、電気スタンドで飾られている。夜には何箇所かの窓辺の電気スタンドを灯し、家の外にも暖かさを醸し出していた。

220年のリンゴの樹 リンドベルグ家の象徴の樹。
実は日本の「ふじ」に比べたら1/3位で黄色。この実で作ったリンゴジャムは甘さが抑えられ少し酸味のある味。絶品！



日本文化の紹介

28日 日本茶パーティ

ティパックの日本茶で お茶菓子はいろいろと饅頭。粘りついてしまったいろいろには、お手上げの様子。

29日 日本料理(?)をご馳走

ご飯(お粥)と具たくさん(白菜・ジャガイモ・ネギ・厚みたっぷりの鱈)の味噌鍋を作り食べて頂いた。お代わりをして頂いたので味は満更でもなかったようだ。ジャガイモとネギは自家製。3人とも箸使いも中々のものだった。

220年のリンゴの樹と

唱歌の合唱

青山さんのハ・モニカの伴奏で「さくら、さくら」と「ふるさと」を合唱した。「ふるさと」は歌詞をローマ字で書いて差し上げたら、すぐ歌えるようになった。

この国の人々には、生まれ育ったふるさとの持つ地域的な特性やその中で過ごした生活環境に対する愛着の念が非常に強いという伝統があるようで、唱歌「ふるさと」に歌われるような生涯変わらぬあこがれは、日本人と共有する感情を持っていると言われている。

30日 書道

ご主人が料理して下さった牛肉と野菜の串焼きと、取って置きの赤ワインで「サヨナラパーティ」をして頂いたあと、小さい硯と墨と習字紙、色紙をプレゼント。青山さんが愛という字を書き、ご夫婦には筆で名前を書いて頂いた。筆使いは上手い。



書道に挑戦

アラカルト

茹で卵スタンド 茹でた熱々の卵を木製の卵スタンドに立て、ナイフで上部を切り、スプーンで頂く。きれいに全部食べることが出来る。

郵便ポスト 自宅周辺のお隣さんと一箇所場所を決め自分でポストを設置する。

新聞6時 郵便10時に配達される。差し出す郵便物をポストに入れておけば持って行ってくれる。



郵便ポスト

車の牽引用フックとコンセント

乗用車にも牛や馬を乗せたトレイラやキャンピングカーなどを牽引出来る様に、フックとコンセントが付いている。車の後ろのバンパの下に設置。設置率は市街地では少なく郊外ではほとんどの車に設置されている。



牽引フックとコンセント

メールの文字 ベンゴトさんのPCをお借りする。Windows XPだが、私からのメールの日本語は表示がなく空欄であった。

妻と友人にメールを送信したが何故か届いてはいなかった。

お別れ 落ちるものを堪える事は出来なかった。これを見ていた添乗員の坂本さんは自分の経験を思い出されたのか、私以上の大きな涙を流されていた。理解して下さる人が居るのだという温かいものを感じた。

おわりに

高齢者入りした私が、ホ - ムスティが出来るなんて思っても見なかった事を経験した。「行って良かった」の一言で全てが表現出来る。

帰国後もホストファミリーとメ - ルの交換をしている。英語能力が劣る私にとっては負担な事ではあるが楽しみでもあるし、これを機に英語を習おうとする気力も湧いてきた。

憧れのカントリー - ライフをチョビッと経験した。目の前に広がる牧草の緑、紅葉で映える木々、毎朝3頭の鹿が横切る牧場、キャンドルが揺れ薪ストー - プの炎の暖かな光と影。ゆったりした時間の流れ。澄み渡った夜空には、膨らみを持って流れる天の川があった。北極星も頭上に大きく輝いている。これ以上望むものがあっただろうか。



カントリーライフ

最期に、障害があるなしに関わらず、人が人らしく暮らしているスウェ - デンの高福祉の実態をある程度知ることが出来、自然豊かな所で家族以上のおもてなしを受け、曲がりなりにも語らい、かけがえの無い思い出をドッサリ持ち帰ることが出来ました事を、全ての関係者の方々に心からお礼申し上げます。初めて体験することが多い日々であった。

タック ソ ミュッケ（ありがとうございました）！

報告書（ウッデバラに滞在して）

築瀬 和子

セントレアから10時間あまり、ヘルシンキは冷たい雨だった。いよいよ、ウッデバラへはあと1時間半のフライトで到着。

1) 第一日目。

イエテボリでウッデバラからの出迎えの人達に会った。

オレンジ色の7分丈コートの陽気なアグネータさんと、男性のラーシュさん。一人一人に自己紹介をされた。カタカナで書くとどちらも簡単だが、耳になじみがなく、発音がとても難しく感じた。「アグネータ」と一度ではうまく言えなかった。もう一度教えてもらい、今度はよかったらしい。次に「リッダール」と姓を巻き舌で発音された。何とか言えたが、やはりなじみがないせいか、すぐに忘れてしまった。私の名前を「カズコ」というとラーシュさんは「ウッ! とてもわからない!」という顔をされた。「簡単な名前なのに!」と思ったが、お互い様というところだったのだろう。

ウッデバラのカーリアホテルに到着後、市の方々の夕食会があった。途中、柴田市長ご一行が入ってこられ、挨拶をされた。料理はいわゆるバイキング形式で、トナカイの肉や、ザリガニも使ってあるということだったが、小さく刻んでありよくわからず、残念だった。

2) 仲好しの像

ウッデバラの中心をベーベ川が流れている。上流の土の影響で濃い茶色の水だ。そのほとりに岡崎から1998年に贈られた仲好しの像がある。3頭身ほどの男女が仲良く寄り添っている像だ。目にした時、懐かしく感じた。通訳の和美さんが、「ウッデバラの人たちは、頭をなでると恋が成就すると信じていて、時々なでていく人がいる」と話してくださり、皆で笑ってしまった。天神様の牛の頭をなでると頭がよくなるという話を混同したことから始まったのか、自然に生まれたのかかわからないが、そんな事で、像に親しんでもらえているのはうれしいことだ。



仲好しの像と

3) ホストファミリー

二日目、歓迎昼食会が旧市庁舎であった。屋内の磨り減った石の階段に歴史を感じた。階段の上で数人の方たちが立って私たちを迎えてくださった。一人一人に「グッモロン」とスウェーデン語で挨拶しながら握手をした。コートを脱いでいたら T さんが「ホストファミリーのご主人がいらしてるよ」と教えてくださった。T さんは3年前、交流団の一人としてホームステイし、その際のホストファミリーの温かいもてなしが忘れられず、また会いたいと、今回は「友好の翼」の一員として参加された方だ。そこのお宅に今回は佐藤さんと私がお世話になる。T さんはわたしを連れていくと、階段の上のお一人に紹介してくださった。奥さんもそばに立っていらして、あいさつをした。

ご主人シシェル デルブレット氏。Kjell と書いてシシェルと発音する。やさしそうな方だった。元校長先生で、今も国際交流の仕事をされていて英語はお上手だ。奥さんはバルボイさん。70歳を過ぎているが、お母さまがイギリス人だったので、とても流暢に英語をしゃべられる。

ご主人は、奥さんが私たちと食事の支度をしていてもじっと座ったままだし、電話がなっても奥さんと呼ぶ、亭主閑白風の方だった。5人の子供さんは皆すでに独立。



夕食会にてバルボイ・デルブレットさんと

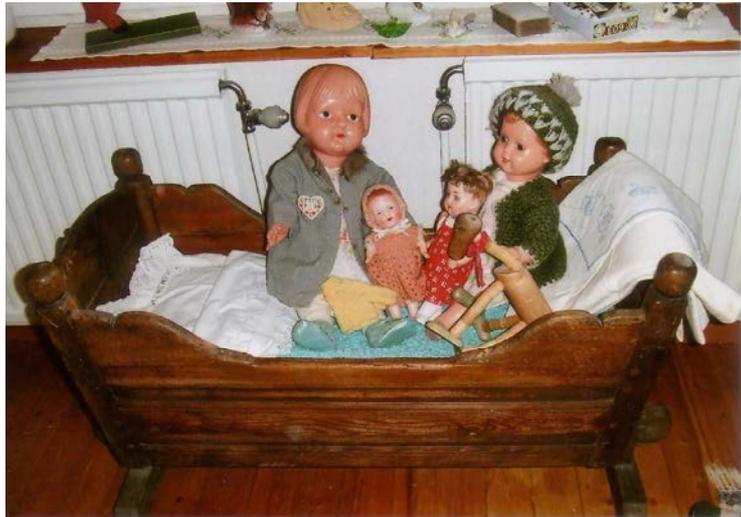
4) 家の様子

夫妻の住まいは、郊外の林の中にあるかわいらしい家だった。壁が白く屋根は赤色。70数年前にバルボイさんのご両親が建てたものに、夫妻が建て増しされた。家のまわりは山の斜面をそのままに残してある。夕方には、噴水のそばの椅子に座ってのんびり過ごすこともあるとか。

広い敷地内には青い家もある。そこは娘さんが結婚されたとき建てたものだが、離婚。娘さんは再婚して他へ移ったが、先のご主人とデルブレット夫妻は仲がよく、その彼はまだそこに住んでいるとか。なかなか割り切った関係だと感心した。

お二人は古いものをきちんととっておく方たちだった。私が使わせていただいた部屋はもと子供部屋で、クローゼットの中に昔のおもちゃが、整理してしまっていた。「我が家のミュージアムよ」とおっしゃる部屋も見せてくださったが、8畳ほどの部屋に3・4世代ほど前からのものが大切にあってあり、今すぐにでも使えるかのようにディスプレイしてある。糸車、葬儀の際の配りもののお菓子、古いミシン、灯台で使用していた大きなろうそく、シシェルさんが使っていたゆりかご……。教師をしている娘さんが学校で生徒たちに見せるために借りていくこともあるそうだ。

さらに、1700年代に建てられたシシェルさんの育った家も見せていただいた。車で5分ほどのところにあり、子どもさんたちが休日を過ごすのに今でも使っているそうで、キッチンには電子レンジも置いてあった。



デルブレット氏が使っていたゆりかごと昔の人形

5) 娘さんの家

再婚して他へ移ったマリーカさんのお宅へ案内していただいた。同じく再婚のご主人の子供とマリーカさんの子供と合計7人で住んでいる。住宅雑誌に出てくるようにおしゃれで海の見える新築の家だった。外まわりは自分たちで少しずつ手を入れて完成させていくのだそうだ。

デルブレットご夫妻の家とマリーカさんの家の、両世代の家はそれぞれに象徴的だ。思い出のものを大切にあってある、古いタイプのご夫婦。現代的な家に住み、再婚同士で、子供たちは両親の家を行き来する新しい世代のカップル。バルボイさんは娘さ

んが離婚すると聞いたときはショックだったとか。マリーカさんは笑みを絶やさず、じっとこちらの眼を見て話をされるとっても素敵の人だった。

6) ウッデバラのこと

500年以上もの間、このあたりの中心地であり、かつては漁業と石関連産業が盛んだったが、20世紀初頭の経済危機で石産業はダメージを受けおとろえた。今も町内外のいたるところに岩盤が露出している。博物館は歴史や産業についての展示がとて充実している。ウッデバラより人口が多く、歴史も古い岡崎にもそのような施設がないのは残念だと思った。

美しい斜張橋ウッデバラ橋と皆の協力でできた海岸の遊歩道が、町の人々の誇りで、郊外のロータリーにある作者不明の木切れでできている小さな犬が、目下の町の人々のマスコットとなっている。中心部の商店街はこじんまりしているが、道路は歩行者専用で、ゆったり買い物ができる。

岡崎のほかの姉妹都市は北西ヨーロッパに6都市あるが、バルボイさんは岡崎が一番興味深いと言われた。唯一のアジアの国で、文化が大きく違うからだろう。

7) 家庭のエコとごみの分別

私は、エコの先進国と言われるスウェーデンの一般家庭での取り組みに興味があった。事前のEメールで、バルボイさんはガーデニングが好きと知らせてくださったので、環境にやさしいやり方を教えてもらいたかったのだが、日常の食卓にのせる庭のりんごやベリー類などにはコンポストで作った肥料を使い、農薬類を使用していないというほかは特別なことはなかった。

私が使わせていただいた部屋の窓は、カーテンはほんの装飾だったが、ガラスは2重になっていた。それだけで断熱性がある。また、地下室には家庭の給湯と暖房に使うヒートポンプの設備があった。初期投資はかさむが、ランニングコストがあまりかからず6年で元が取れ、環境にやさしいので満足しているようだ。

分別の仕方は岡崎とほぼ同じだったが、岡崎でプラごみに分類する薄いフィルム類は可燃ごみとされていた。可燃ごみはオレンジ色の袋に入れ、戸外の容器に入れておくと有料で集めてくれる。そして、ウッデバラ市に新しくできたエネルギープラントで焼却し、地域の発電・発熱にいかされる。資源ごみは近所のごみステーションやショッピングセンターの回収箱に持参する。

8) 北部地区

北部のダラベルグ地区にある図書館を訪れた。前述のきくえさんによると、この地区は「ウッデバラの人たちが一番住みたくない」と心の中では思っているところなのだそうだが、町並みはきれいだった。ソマリアをはじめとするアフリカや、東欧など50もの国や地域からの移民・難民が多く住み、無職の人も多いようだ。地域の核となっている図書館は、人々が溶け込めるよう働きかけているが、言葉等の問題があり

進まない。日本でも同じような問題は多くの地域にあり、私は話し合いたい問題だったが準備も時間もなく、とても残念だった。

外に出るといろいろな出身地からと思える少年の団に出会い、写真を撮らせてもらった。後でバルボーイさんたちが言っていたが、「スウェーデン人の少年たちなら、冷めていて一緒に写真を撮らせてはくれないはず」とのことだ。彼らがどのような幼児期を過ごしたのかなどと考えると胸が熱くなった。戦争や紛争のなくなることを祈らずにはいられない。旧市庁舎での昼食会の時、通商雇用委員長のナガー氏の隣に座らせていただいたが、氏はエジプト出身だ。どのような経緯でウッデバラに住んでいらっしゃるのかは知らないが、各地に移り住む人たちが、努力次第でナガー氏のように受け入れられるようになるといいと思う。



ダラベルグ地区の図書館の外で

9) 宗教

29日、この地域で最古の教会を訪れた。かつては人々の信仰を集めていた感じは十分残っていたが、今では結婚式や葬式でしか使われることはないそうだ。一般的な人々は冠婚葬祭でしか教会へ行かないのだ。

ハロウィーン直前のウッデバラでハロウィーン関連のものは殆ど目にしなかったが、11月1日は万聖節で国民の祝日。そして、たいていの商店は休業になる。きくえさんによると、クリスマスにはいっぱいプレゼントを買わなくてはならなくて少し苦痛とのこと。ミサに行かなくてもプレゼント交換をするなんて、日本と同じだと思った。お米を炊いて、甘いお粥もつくるそうだ。

街中ではどこの家も、窓辺をランプと植物の小さな鉢で飾ってあった。バルボーイさんに言うと「居心地のよい雰囲気のためにね。この時期は特に」との返事。「この時期」と言うのはクリスマス前と勝手に解釈したが、心にひっかかっていた。帰国して、西

洋文化に明るい知人に話すと、「キリスト生誕の前、ヨゼフとマリアがベツレヘムで一
夜の宿を求めるとき、窓の明かりを目印に、起きている家を探した」とかで、そのこと
に由来していると教えてもらい、納得した。「節電」は「この時期」には適用されな
いらしい。

10) こぼれ話

- ・ スウェーデン語会話集を見ていると「こんにちは」は「ヘイ」、「はい」は「ヤー」
とあるが、「ヘイヘイ」、「ヤーヤー」と繰り返して言うことが多い。
「いらっしゃいませ」も「ヘイヘイ」
- ・ ある時同席した方が、姪がコスプレに夢中で日本のロリータファッションをインタ
ーネットで熱心に研究していると心配されていた。
- ・ 表敬訪問の際、グッナルソン氏が、印刷物の漢字を指し、「美しい」とおっしゃっ
た。漢字より横文字をカッコいいと思うことが多いが、反省した。

遠いと思っていたスウェーデンが今では隣の国のように思えるようになり、ウッデバラ
の人も町も懐かしい。今回の交流の体験をぜひ生かしていきたい。

最後まで温かく接してくださったデルブレットご夫妻はじめ、ウッデバラの方々、岡崎
市役所の方々、お世話になったすべての方に心から感謝しています。



シシェル・デルブレット氏と佐藤さんと共に

平成 20 年度市民海外交流団報告書

随 行 岡 崎 市 役 所 秘 書 課 廣 山 嘉 也

はじめに

スウェーデン・ウッデバラへの市民海外交流団の随行を命ぜられたとき、私は 20 年前にウッデバラから来岡された提携 20 周年記念使節団の受入れをお手伝いしたことを思い出した。当時ウッデバラ市の市議会や経済界など各界各層の大勢の方に岡崎市へ来ていただいた。年配の方が多くほとんどの方が英語を話さずスウェーデン語のみの交流であった。言葉のせいか口数も少なく、おとなしい人たちであるという第一印象であった。しかし、数日一緒にいると、どの方からも温かくやさしい人柄が滲み出てきて、とても心温まるすばらしい時間を過ごすことができた。この思い出が封印から解かれたように脳裏を巡ったのだ。再びウッデバラの人々と交流できることをとても光栄に感じた。

スウェーデンという国 ウッデバラという都市

それ以来、私はスウェーデンやウッデバラの現況を知るため、自宅ではパソコンに毎日かじりつくことになる。調べても分からないことについては、在日スウェーデン大使館にメールを送ったところ、大変親切な回答をいただいた。今後交流される方のために基本的な事項について記しておく。

正式な国名はスウェーデン王国。国王はカール 16 世グスタフで立憲君主制であり議会民主制の国である。公用語はスウェーデン語。しかし、50 歳以下の方のほとんどが英語を話す（小学 3 年から第一外国語として英語を学ぶ）。今は年配でもカタコトの英語を使われるので、英語であればどこでも不自由はない。人口は、9,201,650 人（ウッデバラ市は 50,000 人強）。通貨はスウェーデンクローナ（略称：SEK、EU 加盟国であるがユーロを使用していない）で、少し前までは 1 クローナ 17 円程度で安定していたが、金融不安の現在は 11～13 円を日々変動している。補助通貨にオーレ（1 クローナ = 100 オーレ）があるが、日常の買い物でオーレは 50 オーレ硬貨以外あまり目にしない。間接税として物を買くと 25 パーセントが課税される。ただし食料品など生活必需品は税率が少し低い。すべて内税であるのでそう意識はしない。電気は 220V で、コンセントには 2 本ピンの C 形プラグを使用している。チップはタクシー以外いらぬ。水が豊かできれいな国なので、水道水がそのまま飲める。教育は 6・3・3 制で、義務教育は 6・3 で日本と同じである。

またスウェーデンは世界の実験国家とも呼ばれている。福祉をもっとも進めて国であり、環境についても世界の最先端を行く国でもある。

次にウッデバラ市（ウッデバラコミューン）についてだが、南北に長いスウェーデンの南西部に位置する海に面した街である。スウェーデン第 2 の都市イエテボリから北に 80 キロ

に位置する。ウッデバラの位置するスウェーデン南西部は、メキシコ湾流（暖流）の影響もあって、高緯度地域でありながら比較的温暖である。

ウッデバラへ

10月26日午前8時に、6名の市民海外交流団の6名の方々と岡崎市役所を出発した。セントレアで友好の翼の11名の方々と合流し、空路でフィンランドのヘルシンキへ進み、欧州への入国手続後、イエテボリまで再び空路を移動し、スウェーデンに現地時間の午後4時過ぎに無事到着した。

空港の到着ロビーの中央にはボルボ自動車社製の工作建機が陳列しており、この地方でのボルボの存在の大きさを感じた。このあと、一般ロビーで出る通路で黒服の警察官5人と麻薬犬の出迎えを受け、ちょっと緊張した。やはりここはヨーロッパなのだ。空港のロビーではウッデバラ市役所の広報担当のアグネッタ女史と部下のラーシュさんが待っていてくれ、握手と英語そして笑顔で出迎えてくれた。

その後、イエテボリ空港からはウッデバラまでバスで移動したが、ウッデバラは陸路でも交通の便のいいところで、E6道路という高速道路のような高規格道路を飛ばして移動する。ゲートがないので通行料は無料のようだ。街路灯があまりなく、真っ暗な中をバスは走っていく。時折、対向車の明かりが見える。制限時速の道路標識が日本と同様にキロ表示であるので、親しみを感じるが、走行するのはむしろ右側であるので、ちょっと違和感がある。バスの中では、こちらに住んでいる日本人のかたが通訳してくれた。アグネッタ女史が長旅で疲れているでしょう、必要最小限のことだけ連絡するから、到着するまで寝ていてくださいと気を使ってくれる。しかし、ウッデバラがどんな街なのか気になってしかたない。暗いなか現れる道路標識をみているとウッデバラの表示を見つけた。いよいよウッデバラである。日本と比べると街灯が少ない。それだけ治安がいいのか、環境保護のためなのか、それとも日本が多すぎるのか。

大きな水面の向こうにモダンな吊り橋が見える。アグネッタ女史が日本人の設計であることを教えてくれる。

どうもウッデバラの人々の自慢の橋であるらしい。先程いただいた資料のレターヘッドにもこの橋が描かれている。ウッデバラ大橋という名らしい。

だんだん街中に近づくと一軒屋や2階建てのアパート、マンションのような中層建築物が見える。そこに目を引くのが窓である。9割位の窓が両側にカーテンがついているが中が丸見えである。大体の窓の中央にしゃれた照明器具がありその両側に対の花鉢か対の花瓶が置かれている。外はあまり街灯もないので真っ暗で、部屋からもれてくる明かりに目が惹かれる。蛍光灯の青白い明かりでなく、白熱球のようなあかい温かみを感じる色である。それもテーブルの上を照らす照明器具と壁を照らす間接照明のコンビにしてあり、すっきりしたデザインで明るい色目の北欧家具を美しく照らしている。窓がそれぞれの家のショーウィンドウのようである。あきらかに見られることを意識した飾りかたである。個々

の家の窓が、街を飾るパブリックスペースのようにになっている。



飾られた窓

現地時間の午後 6 時過ぎに、市民海外交流団の宿泊するカーリアホテルに到着した。午後 7 時 30 分からホテルの近くのレストランでウッデバラ市側が歓迎の夕食会を催してくれるとのことで、時間まで送迎にきてくれたアグネッタ女史とラーシュと歓談をした。アグネッタは五十代のご婦人、ラーシュは三十代位の青年に見えたが、ご婦人に年齢を聞くのも失礼なので、今でも分からずじまいである。私が英語を苦手としていることを察したアグネッタは、「どんどん話せば上達するわよ」と徹底的に私に話かけてくる。彼女は積極的な性格で、ラーシュさんはその逆で、口数少なく、うなづき役である。冷汗の連続であったが、国は違うもののお互い公務員であるので、何かと共通の話題がある。夕食時間近くには ISO14001 の取り組みまでお話することとなった。やはり環境問題については、スウェーデンのほうが数段先を行っている。公用車の 8 割以上がすでにエコカーに切り替わっているそうだ。歓談の終わりには 1 キロ位やせたような気がする。英語がうまく話せたらとつくづく思った。

記念すべき一日

翌 10 月 27 日は、ウッデバラとの姉妹都市提携 40 周年記念の主要事業が行われる日である。この日は岡崎市からウッデバラを訪問した 4 団体が合流する。4 団体とは、柴田市長・稲垣副議長（当時）などの岡崎市代表团、私が随行している市民海外交流団、O I A が募集した市民の皆さんによる友好の翼、岡崎市中学生交流団であり、総勢 31 名である。

まず午前 10 時からウッデバラ市役所への表敬訪問である。ここで、先方に日本の五月人形（武者の鎧）を贈呈するためのセッティングに、午前 8 時過ぎに会場である旧市庁舎を代表団の随行の間宮班長と訪れた。旧市街地の中心に王様の広場という石畳の広いスペー

スがあり、その東面に歴史のある黄色い建物が旧市庁舎である。広場では、壮年の夫婦がクリスマスリースを並べて露天販売の準備をしている。二七市みたいなものだ。

現在の庁舎は郊外にモダンな建物があるそうだが、旧市庁舎は壊されることなく歴史的な街並みを形成している。ヨーロッパの人たちはこういうものを非常に大切にしている。石畳にしてもバリアフリーの観点から見れば、凸凹していて高齢者や障がい者には決してやさしくない。しかし、それ以上に重要なものとして保存されている。正面の国旗掲揚場にはスウェーデンの国旗と日の丸が掲げられていた、それを見ただけで、ウッデバラ市側の配慮が伝わってくる。ちょっと寒いが、青空が広がり朝日がまぶしい。今日の記念すべき日を祝うようであり、誠に晴れがましい気分である。

会場である2階の議場での準備を終えた頃、岡崎市の各団体が次々に会場に参集した。ウッデバラ市側が議場の前室に数種類の飲み物とケーキを並べてくれていて、各々それを手にとり議場内の好きな席に座り、いただいているうちに議長の挨拶が始まり、セレモニーが始まった。

我々がこのようなセレモニーを主催するとタイムテーブル決めて、それにのっとり進行していくのが常であるが、ウッデバラ市のやり方は相撲に立合いみたいなもので、双方がその気になったら始め、そろそろだなと思ったら終わるというものである。その後のセレモニーもほぼ同様に進行していった。最初はとまどったが、ホスト側が来客の気持ちを察し進めていくというのは、おもてなしの心構えとしてとても大切なことであろう。自分の都合が進めがちな日本のやりかたは、少しは考え直してみる必要があるかもしれない。ウッデバラでのカルチャーショックのひとつであった。

セレモニーは極めて和やかな内に進められ、ラルフ・スティーン議長と柴田市長のすばらしいスピーチで一層絆を深めていこうとの決意を新たにし、無事終了した。

次はポーヒュースレーン博物館での「日本の子どもたちの絵画展」のオープニングである。ポーヒュースレーンというのは、広域の地域の名前であり、岡崎市でいえば「西三河」や「三河」といった感じであろう。800メートルほどの距離をコートの上を立って全員で歩いていく。途中、10年前に岡崎市から送った仲良し像の前を通っていく。岡崎産の黒花崗石が、ウッデバラの歴史的な街並にもとてもマッチしている。ここで皆さん記念写真を撮る。途中幹線道路を横断するが、この道沿いにもスウェーデン国旗と日本の国旗が掲げられ、着いた博物館の前にも両国旗が掲げられていた。ウッデバラ市側のもてなしの心が伝わってくる。

博物館の2階での絵画展のオープニングに立ち会ったのち、再び旧市庁舎へ歩いて戻る。2階の大広間に案内され、全員揃っての昼食会が始まる。魚介類のシチューとパン、コーヒーの食事でも和やかに行われた。この日からお世話になる市民海外交流団のホストファミリーの多くも参加した昼食会で、会話がはずんでいる。

中学生の諸君は、ウッデバラの中学生ともう仲良しになっていて本当に楽しそうに会話している。ウッデバラの中学生は体格がよく、私の目には高校生どころか大学生位に見える

しまうが、岡崎の中学生諸君はものおじもせず、実に堂々としている。未来の交流を担ってくれる彼らに頼もしさを感じた。

リルスイエベルケット発電所

昼食の後は、ウッデバラ市の最新発電所を案内していただいた。ウッデバラ市の一番標高の高いところに建設された発電所の特徴は、その熱源をごみとしているところである。日本では、ごみ処理場で余熱を利用し発電しているところはたくさんある。岡崎市でもそうである。この施設の進んでいるところは、第一義がごみの焼却でなく、発電としているところである。コンセプトが違うので、当然設計も違うのであろう。日本のごみ処理施設では大きな電力を得られないが、リルスイエベルケット発電所では1時間あたり20万キロワットの熱源と6万キロワットの電力を生み出す。ウッデバラ市では水を水道として供給するとともに、温水も暖房の熱源として供給している。ホテルの個室にもラジエター型のヒーターがあり、寒くなると温水を循環させ暖をとる。その為、この発電所は市内で一番高い位置に必要なのである。しかし、発電の原材料の主体がごみであるので、発電所の建物周辺はごみ臭かった。環境という分野で進んでいる国は、視点からして違うことに目から鱗が落ちる思いだ。

高温で燃焼するため、ダイオキシンなど有害物質の排出の心配はないとのことであるが、投入したごみの15パーセントも残渣が出るという。この点はちょっと疑問である。

発電所の後は、スカルバンクスという貝塚を案内していただいた。古いものらしいが、化石というよりは古くて小さな巻き貝白っぽくなったものが、掘ると砂のかわりにいくらかでも出てくるといった場所である。ここを見学していると雨が降ってきた。ウッデバラは10月から11月にかけてはずっと雨が降るそうである。気温は一日通して-1度から2度くらいで岡崎の冬である。また天候が一日に何度もコロコロ変わる。次の除幕式でこの急激な天候変化を体験することとなる。

除幕式

午後4時から、岡崎市からウッデバラ市へ送る雪見灯籠の除幕式が行われた。場所は旧市庁舎の少し南西にある公園である。街中であるが、籠田公園を東西に二つ並べた位の公園で大きな木を幾本も生えている。公園の周りを裁判所など古く歴史のありそうな石造りの建物が囲んでいる。中央に噴水があり、雪見灯籠が設置されているのはこの公園の東側の見通しの良い芝生の上だった。

午後4時前に現地に着くと、すでにウッデバラ市民の皆さんがたくさん集まっている。また紺色の制服姿の音楽隊と赤い制服のバントワラーの少女隊が練習していた。大がかりなロケーションに感激しているとまもなく除幕式が始まった。ラルフ・ストーン議長あとに柴田市長が挨拶をされる。そして二人で紺色の布をとり除幕。明かりのついた雪見灯籠が現れ、拍手が沸き起こった。

その後、アトラクションで音楽隊と音楽に合わせたバトントワリングが始まったが、同時に雨もポツポツ降ってきた。3曲ほど続けて演奏されたが、雨はますます強くなるし、日没の早いウッデバラでは日もどんどん暮れ始める。このような天気が慣れているのかウッデバラの人たちは一斉に傘をさし、帰る人はいない。たいへんな天気になったが音楽隊もバトンの少女たちも一所懸命がんばってくれて、中断することはなかった。終わり間際には雹と霰が降り出しすさまじい天気となった。このような天気は初めてで、除幕式ともども忘れられないものとなった。

歓迎夕食会

記念すべきこの日の締めくくりが、ウッデバラ市主催の歓迎夕食会である。岡崎市の全員、ウッデバラ市幹部の皆さん、中学生や市民海外交流団のホストファミリーなど100人を超える大がかりな夕食会である。会場はウッデバラ市郊外のポーフェースガーデンというホテルのレストランであった。ここでも、レストランの前のロビーでウェルカムドリンクを飲み歓談しながら、徐々に宴会場に移動する。「通常、ウェルカムドリンクはアルコールであるが、中学生たちがいるので今日はノンアルコールだ」との案内を受ける。席を探しているとアグネッタ女史が自身の前の席に誘ってくれた。市民海外交流団の方々はそれぞれのホストファミリーと同じテーブルに着席されている。

まず照明が落とされアトラクションが始まった。ウッデバラでは空手や剣道など日本の武道が盛んだそうで、それぞれの道場の門下生が模範演技をしてくれた。動きと道着は、日本と変わらない本格的なものである。

その後に、登場したのが、我が市民海外使節団の須賀団長である。薩摩示現流の模範演技を披露していただいた。ウッデバラの若者の模範演技はスポーツとして剣道で勢いがあるが、須賀団長の模範演技は古来より続く剣の道であり、その精神を伝える風格ある所作であった。

続いて夕食会が始まった。ウッデバラの若者による歌やチェロなどによる古典音楽の演奏が行われた。多分音楽大学の学生さんたちではなかろうか。上手であるし、生の音は心に響く。その合間にラルフ・スティーン議長、柴田市長、稲垣副議長のスピーチがあり、和やかな時間がゆったりと流れた。最後に登場したのは岡崎の中学生の諸君である。英語でのスピーチ、踊り、歌を組み合わせた見応えのあるパフォーマンスを披露してくれ会場は最高に盛り上がり、終宴となった。気がついてみれば、午後10時30分になっており、実に3時間30分の長丁場であった。そして内容の濃い夕食会であった。これをもって、姉妹都市提携40周年のウッデバラでの記念事業を終了した。

ウッデバラの現状を聞く

翌朝、ポーヒュースニンゲン（日本語に訳すと「ポーヒュース人」スウェーデン語の発音はポーヒュース人間と聞こえるところが面白い）という新聞をホテルの食堂で見ている

と、昨日の柴田市長とラルフ議長の雪見灯籠の除幕の写真がウッデバラ版の1面に大きく掲載されていた。友好の翼のメンバーがカーリアホテルの向かいの新聞店で売っていることを教えてくれたので早速買いにいった。

さて28日は、ウッデバラ市側が市民海外交流団と友好の翼のためのプログラムを用意してくれていた。まず旧市庁舎の議場で、ウッデバラ市役所の各部署の責任者から市政の説明やQ & Aが行われた。市民海外交流団と友好の翼の方々がそれぞれのテーマに沿って数多く質問をし、時間が足らなくなったしまった。これらの詳細については、団員の皆さんがそれぞれ報告されてみえると思うので割愛したい。

ただ岡崎市職員として驚いたのが、ウッデバラ市の職員数である。人口37万7千人の岡崎市では、3,000人規模の職員数で人口100人に1人以下である。ウッデバラ市では職員が5,000人位いるそうである。人口が5万人強であるので、10人に1人近くは職員なのである。また移民も多いに驚いた。現在30数カ国の方が移民し、人口の10%以上になっているという。

また、興味深かったのが、高福祉のウッデバラでも不満をいう人々はあるようだ。スウェーデンでは、福祉は進んでいて、細かい配慮やサービスがある。しかし、税負担率が高い、所得税で半分以上、買い物しても25%が消費税でもっていかれてしまう。当然国民が高負担であるので高福祉は当たり前と思うのであろう。どこで折り合いをつけるかは、その国の国民の選択なのだと思う。

ロータリークラブ主催の昼食会

少し時間を延長してしまった我々は、足早に旧市庁舎を出てカーリアホテルに向かった。

朝は曇りであったが、今はよく晴れている。ふと足もとを見ると自分の影が長く映っている。まるで日暮れのように長い。時間は午後零時15分。太陽を見ると南の随分低い位置にあり、まぶしい。ここの緯度が高いということ思い出した。

カーリアホテルに行くと、ロビーはスウェーデンの男性で一杯だった。ウッデバラのロータリークラブの方々が我々を昼食に招いていただいたのである。

全員揃ったところで、ホテルのレストランに入った。席はなるべく、岡崎の人とウッデバラの人が交互になるように座ってくださいと呼びかけられた。私の左の席は高齢の立派な紳士が座り、右隣はとても体格のいい制服姿の髭の同年輩が座った。

鐘がなりセレモニーのようなものが始まった。このロータリークラブの会長さんのお話である。お話を聞いていると、会長さんは市役所の職員で、外国の人を招いての昼食会は初めてだとのことだった。会食が始まると周りの人からいろいろ質問を受ける。ホスト側としての配慮であろう。年配の方はやはり、英語がカタコトな感じである。私もカタコトなのでカタコト同士でもなんとか通じるもので、隣に座っている高齢の紳士も、いろいろ話かけてくれた。ウッデバラの街は500年以上の歴史があるが、岡崎はどうかと質問された。また、君はロータリアンかということも聞かれた。

隣の同年輩の制服のマークが日本の消防のマークそっくりだったので、聞くとウッデバラ消防署の消防職員だという。話していると、どうもこのロータリークラブのメンバーのかなりの人数がウッデバラ市の職員らしいということが分かってきた。日本ではロータリアンといえば、会社経営者の方がほとんど公務員は非常に少ないと思うが、スウェーデンでは違うらしい。会長がさっきから随分時間を気にしているのは、勤務時間に遅れる人がたくさんいるからのようである。

会食の最後に市民海外交流団と友好の翼のメンバーが自己紹介と簡単なスピーチさせていただき、締めくくられた。多忙な中、お招きいただいたロータリアンの方々に感謝を申し上げたい。

ポーヒュースレーン博物館

次に訪れたのはポーヒュースレーン博物館。昨日、岡崎の児童生徒などの絵画展をオープンした博物館である。

博物館の西は運河で、小さな船やヨットが係留されている。前面は広い芝生、東側は木立のプロムナードになっている。

ウッデバラの中心市街地は古い建物や石畳が保存され伝統的な美しい街並みを作っている、それに対し博物館周りの修景は現代的に広々と整備されており、これはこれですばらしい。私はこの場所は大好きになった。

中に入るとなかなか充実したミュージアムショップとその奥に階段状になったレクチャースペースがある。

その奥では、この地方の歴史を節目で区切って、その時代の物を展示したコーナーを連ねるというアプローチがなされている。

ウッデバラ市の歴史をかい摘んで説明すると、「かつてはパイキングの住処であったが、500年ほど前から漁業の街として市街地を形成してゆく。長らく漁業と特産の花崗岩を産出する街として脈々と続いてきたが、第二次世界大戦後から1980年前半まで造船の街として栄え、世界で6番目に大きなタンカーも造船したことがあった。その後造船不況により街の経済が停滞したが、ボルボ自動車の工場が建設されたことで、街は再び活気を取り戻した。」というところであろうか。

また別の部屋には、ウッデバラの鳥類などに自然と環境についての展示がある。小中学生もきちんと説明を受けながら順にまわれば、自分のふるさとの歴史、自然そして守らなければならない環境というものを十分に理解できる構成となっており、ビジュアルにかつコンパクトに展示されている。以上がメインの常設展示であり、それ以外にも展示ホールがまだ3、4あり、企画展が複数同時開催できるキャパシティーがあった。

訪問したときは、前衛音楽家の映像展示と生活の中の青と白をテーマにした展示会が行われていて、アメリカの古いジーンズ、戦前のウッデバラの女学生の紺色の制服から日本の藍染めや刺し子までのテキスタイル関係の展示、また中国明代の古染付やオランダのデ

ルフト焼、伊万里の染付皿、南欧や東欧の青いガラス製品なども同時に展示され、500年位前から近代までの欧米とアジアの生活の中の青色と白色を幅広く展示した内容の凝った企画であった。

またこの地方の絵画作家の油絵を展示した常設ホールもあったが、こちらは市民の寄贈した絵画を寄贈者別に陳列してあり、せっかくのすばらしい絵画であるので、もうちょっと工夫が欲しいと思った。それから、常設展示には、戦前戦後にポーヒュースレーン地方で漁師の奥さんが内職で編んだ緻密なポーヒュース編みのセーターなどの名品もあった。

全体を見て感じたのは、女性の視点である。歴史展示も企画展も女性や日常生活という視点がはっきりみえてくれる。ウッデバラでは成人した女性の8割が社会進出しているそうである。日本そして岡崎でもさらに男女協働の社会が進行すれば、このような展示が見られるのではないかと大変興味深く見学させていただいた。それから、これだけ内容のある博物館であるが、入場は無料である。

見学後、3時になったので館内に併設されたコーヒーショップでティーブレイクを設けていただいた。甘いケーキを出してもらったが、ウッデバラでは男性も甘いものが大好きで食後に必ず、とっても甘いケーキやクッキーを頬張る習慣がある。下戸で甘いものに目がない私には天国のようなひとときであった。



日本の国旗も掲げられていた

リハビリセンター

次に案内していただいたのはリハビリセンターである。当初は別の福祉施設の希望を要望していたが、入所者のプライバシーの問題がクリアできず、このセンターとなった。リハビリセンターと書いたが、リハビリ専門病院というのが本来であろう。見学後の私の印象は個人個人の治療がきちんと確立されているということだった。詳しくは団員の方々の報告に目を通していただきたい。この日までは、市民海外交流団と友好の翼の方々が一緒の行動であったが、友好の翼は明日からストックホルムに移動の予定である。市民海外交流

団の方々は明日以降、ホストファミリーとの行動が、ウッデバラ市主催にツアーに参加されることとなる。私にはホストファミリーがいなくホテル宿泊なので、明日一日、ウッデバラの景観や市民生活を画像に記録し、岡崎の方々に紹介するためにウッデバラの街を歩き回ることにした。

ウッデバラを歩き回る

29日、本日は単独行動の日である。昨夜、地図とにらめっこして徹底的に地形を頭にいった。ちょっと不安はあったものの、治安の良いウッデバラであるので、思い切って出かけることにした。ウッデバラ市内にはバス網があるのだが、スウェーデン語表記で間違えそうなので、徒歩で歩き回ることにした。ちょうど通勤時間だったので、中心市街地ではたくさんの人とすれ違った。どなたも厚手のコートを着ている。ウッデバラの10月末の寒さは岡崎の12月下旬くらいの感じだ。外を歩くのに厚手のコートが必要である。しかし、室内に入ればかなり、暖房が効いているので、長袖のシャツ1枚でも大丈夫である。若い人には厚手のコートの下は半袖のTシャツという人も多い。この時期にウッデバラに出かける方は、厚手のコート1枚だけ忘れずにお持ちになるといい。

さて、まず私が出かけたのは、ウッデバラ西部の海岸にある「ストランドプロムナード」である。初めてウッデバラ市の旧市庁舎に入ったとき、ストランドプロムナードの小さな写真が飾られているのを見て興味を持ったのである。フィヨルドの特徴の表れた岩の崖っぷちに散策路を吊ったウッデバラの新名所らしい。位置は歓迎夕食会を開いていただいたボーフェースガーデンのさらに西である。

途中、住宅地を抜けていく。歩道には、ほとんど人はいないけど、郵便配達が各家を回っている。日本では赤色が郵便のイメージであるが、こちらは黄色である。また1社だけでなく複数あるようだ。一番見かけたのが黄色にホルンのシルエットが白抜きされた会社のポストだった。小荷物はライトバンで配り、手紙類は自転車で配っている。その自転車がユニークだ。前輪に補助輪がついているので、自立しており倒れない。配達人が一タスタンドを立てる必要がない。それから電動アシストもついているようだ。ローテクとハイテクの融合である。

初日に見たとおり、どの家の窓をきれいに飾っている。海辺の街なのでヨットや灯台などのミニチュアを飾っている人もいる。家は木造が多く、可愛らしい形が多い。家の外にはどの家も分別ごみ箱を置かれている。

1時間ほど歩いて、現地についた。小さいけれど砂浜もあり、短い夏には海水浴もできるようだ。飛び込み台や人が溺れた場合の浮輪も常備されている。そこから左の小道を進むとプロムナードがあった。ほとんどが木製で幅が5メートルほどで、かなり厚い木材でできている。幅が10センチほどの踏板が丈夫に取り付けられている。水面まで3メートル位の高さで左側が岩石、右側は海である。はるか向こうにはウッデバラ大橋がとてもよく見える。大橋を見ることも建設理由のひとつでないだろうか。崖淵に沿っているので直線部

分が少なく。曲線部分は踏み板が鋭角な三角形になっている。



ストランドプロムナード

ときおりベンチがあり休憩ができる。日当たりにいい場所のベンチで休憩した。海を一望でき、なかなか気持ちいい。全長は 500 メートル以上ありそうで、中程には屋根のついた部分もある。上部の岩場から太い金属のワイヤーで吊っているのである。散歩やジョギングをする人が通りすぎる。知的障がいの方の団体が付き添いの人と一緒に散歩している。福祉施設の日課のようだ。

このように人々にたいへん愛されているストランド・プロムナードであるが、それには理由がある。どなたが発案されたかは聞きそびれたが、第3セクター方式で建設したそうだ。市民と企業と市でお金を出し合って作ったのだ。建設途中資金不足に陥りたいへんだったらしいが、市民に再度寄付を呼びかけ完成させたそうだ。現地では気がつかなかったが、踏板一枚一枚に寄付してくれた人の名前が刻んであることをあとから聞いた。

市民生活に絶対必要な公のものは公費を全額投入し、プラスアルファの部分はみんなでお金を出し合う。自分で直接お金を出しているので利用者は大切にすし、企業にとっては地元へ還元や貢献になる。行政としても、市民や企業に呼びかけ反応がなければニーズがないということで止めればいいし、反応があれば要望が多いということで事業を進め、最小限の支出をすればよい。なんとも合理的なシステムである。

おそらく老朽化して、補修が必要になった場合も同じ方法でお金を集めるのであろう。そこで補修費がなければ集まらなければ、もう不用の施設ということで、そこは市で撤去するのであろう。こういうものに高い税金以外にお金を出してもいいと判断でき、実行できる市民や企業のいる成熟した社会でなければ実行は不可能だ。岡崎ではどうなのであろうか。

中心市街地に戻る途中、スーパーマーケットがあったので寄ってみた。入り口には回転式

のバーがあり、一方通行で後戻りできないようになっている。一瞬躊躇したが丁度お昼なので、食べるものを買えばいいと思って入ってみた。スウェーデン人は背が高いので、かなり上にまで商品が陳列してある。私も日本人では背が高いほうであるが、一番上の棚の商品をとるのに、ずいぶん苦労しそうだ。

店中の品数は非常に多かった。特に種類も量も多いのが、チーズやヨーグルトなどの乳製品とパン類である。日持ちがよさそうなファイバークネッケという乾パン類が多いが、その他のパンもすごく種類が多い。肉類は日本と同じようにパックに分けられての販売だが、魚だけは対面販売だった。

ウッデバラの人は魚が大好きである。主に鱈と鯉と鮭である。滞在中もほとんど魚料理ばかりであった。それゆえ、魚は大切に、生魚を店主が注文の応じて切り分けていくようである。昼食にサンドイッチやパック詰めの野菜サラダなどを買おうとしたがかなり高かった。レストランで食べたほうが安かったのではと思ったが、今日は市民生活を体験する日であるので購入してみた。

レジは何台も並んでいるが、通路が狭い。ここを通らなければ絶対外に出られないようになっている。買いたいものがなかったら、どうすればいいのだろうか？レジの手前にはベルトコンベアがあり、買い物を置くと仕切り棒で前後の人の分と区別する方式だ。一人分ずつベルトコンベアが動き、自分の番になった。ベルトコンベア越しにレジの担当者がいる。バーコードを読み取り総額が表示される。たまたま小銭がないので紙札を渡すと私の目前にあるバスの精算機みたいなものからお釣りの硬貨でできた。次の人の所作を見てみると札は人に渡し、小銭は手元の精算機に入れるらしい。表示で決済が済んだことを確認するとレジの担当者は「OK . タクソミッケ (どうもありがとう) 」と言っている。

自分の買ったものをレジ袋に入れようとしたら、袋がない。後ろに人は自分のポシェットからエコバックをさっさと出して買った物をしまっている。環境先進国ではもうレジ袋はくれないのだった。しかたなくカメラと買ったものを両手に抱えて、ホテルに戻って食べることにした。夜に別のスーパーマーケットで買い物をしたら、レジの手前に各種レジ袋が値札をつけられ置いてあった。必要な人は、必要な袋を買って入れるシステムであった。

帰る途中フォルクスワーゲンのディーラーの前を通ったが、店頭飾ってある新車を大きなカッティング文字で飾ってある。よくみると 100 キロメートル走った場合の二酸化炭素の排出量を誇らしげに宣伝しているようだ。二酸化炭素の低排出がセールスポイントになるところにも、ウッデバラの人々の環境に対する関心の深さが伺い知れる。確かに日本製のハイブリッドカーもよく見かけた。ウッデバラ市内では、ボルボはもちろん、三菱のディーラーも営業していた。

ホテルの自分の部屋で食事(買ったサンドイッチやサラダなどはあまり口に合わなかったがヨーグルトは美味しかった)を済ませた後は、再び中心市街地に撮影に出かけた。随分昔の大火で家がほとんど燃えたことをウッデバラ市の方から聞いていたが、それ以降に再建された家々がずいぶん残っている。ほとんどの古い家屋は今でも人が住んでいるようだ。

窓や入り口がきれいに飾られている。被写体になる美しい家屋や路地がたくさんある。

平日にもかかわらず結構買い物する人がいた。初めてウッデバラに来た日曜日は、まったく人がいなかった。あとから聞いたのだが、日曜日は商店が休みになるそうだ。それから中心市街地の商店は、営業時間がとても短い。飲食店以外は午前 10 時に開店し午後 3 時には閉店してしまう。このように慣例的な利便性の悪さが、客足を最近郊外にできた大資本の大規模店舗にとられているようだった。商業の状況は、日本と同じようである。写真を撮って回っているうちにどんどん閉店していく。

ひととおり見てまわると、たくさんの商店があるが、必需品ばかりで贅沢品を売っている店が全然ないことに気がついた。一番目についたのが、カーテンやカバー類などを売るテキスタイルの店。カーテンの柄は日本では考えられないくらい大きく、横幅が短い。窓の両端を飾るだけであるので、横幅がいらないのだ。あとは子どものキャンディショップや雑貨屋（なかなかしゃれたデザインが多い）、若い人のカジュアルウエアの店、パン屋、花屋、鞆屋、文房具店などで、高価なブランド品などは一切売っていなかった。生活に必要なものだけでいいというウッデバラの人々の堅実な生活が見えてくる。

店舗面積が一番大きいのは銀行で、不動産も扱っていた。そこでは両替や送金のためか、あらゆる人種の人々が順番を待っていた。さながら国際空港のロビーのようで、ちょっと緊張感を感じる場所だった。

その後、冷えてきたのでトイレにいきたくなり、店舗がたくさん入居しているショッピングモールに入ったが、公衆トイレは有料で 5 クロナ硬貨を入れれば扉が開かない。たまたま 5 クロナ硬貨を持ち合わせていなかったので、慌ててホテルまで戻ることになった。スウェーデンでは、外出の際は 5 クロナ硬貨を忘れてはならない。その後は、博物館界隈のウォーターフロント方面の撮影にいったが、すぐに日が暮れてしまった。緯度が高いので冬が近づくと日没もとても早いのだ。

ポーヒュースレーンツアー

翌 30 日は、ウッデバラ市側企画のポーヒュースレーンツアーに参加させていただいた。博物館前に午前 10 時 30 分に集合である。出かけると、広報担当のアグネッタ女史と市民課のエバさんが待っていてくれた。アグネッタは早速、「昨日はなにしていたの？」と積極的に話かけてくれる。そして「ストランド・プロムナード」について聞くといろいろ教えてくれた。ホストファミリーとともに市民海外交流団の方々も全員参加してみえた。昨日のツアーに参加された方から、ウッデバラ市内の図書館や教会などを見学されたことを聞いた。

今日 30 日は、1 日かけて、ポーヒュースレーン地方のウッデバラ市の周辺の街を見学させていただける予定だ。今日我々が乗ったマイクロバスはベンツ社製のものであった。ウッデバラに来てから何度かボルボ社製などの観光バスに乗ったが、いずれも天井に非常口がついている。転倒したり、水没したりした場合の脱出口なのであろう。また、どの車に

も必ずガラスを割るハンマーが数本備えられている。これを見て、平成20年8月末豪雨の緊急招集で、駆けつけていく途中何度も水没しそうになったことを思い出した。いざというときのために、このような準備を日頃からしておくことは大切であると痛感した。

バスはE6道路を北の方向に走っていく。この道を3時間ほど走行すればノルウェーの首都オスロまで到達するはずだ。途中、車窓からは牧場や、花崗岩の岩肌がむき出している様子や、黄色く色づいた雑木林など、自然に手をいれていない風景を見ることができた。日本のようなコマーシャル看板はまったくない。どこをみても高い場所は岩の塊であり、岩山の大地に植物の堆積と岩の風化によってできた土がへばりついているというのがこの地方の地質のようだ。岩の上に土が載っているので、E6道路でも数年前に大雨で大きな土砂くずれ事故があり犠牲者がでたことをアグネッタが説明してくれる。

1時間ほどでE6道路を降りて、地道を走る。このあたりの家屋も木造で、ほとんどがエンジ色のペンキが塗られている。やがて到着したのは世界遺産にも指定されているターヌムの岩石刻画であった。紀元前1000年～500年前に岩に刻まれたプリミティブアートである。傾斜地に露出した表面のなめらかな岩肌に男性、女性、子ども、船、動物などがあちこちに彫られている。シンプルがゆえに心に残る造形である。わずか線であるが、愛とか死とか表現されているものがストレートに伝わってくる。彫られた線には、この地方の家の外壁と同じエンジ色のペンキが塗られている。見学していたときは、雨が降っていた。完全の露天にさらされており、雨や風にさらされ消えてしまわないか心配してしまった。日本にこの遺跡があれば、しっかり屋根やら壁やらをつけてしまうに違いない。

その後は、地道を通して、この地方の集落を車窓から見学させてもらった。どの集落にも大きい小さいはあるが必ず教会がある。日本の村にもお寺や氏神様があるのと同じだ。集落にはごんまりとした家が多く、どこを見ても絵になる。午後2時近くまで車窓からの見学を行い、その後避暑地となっている港街の海際のレストランで昼食を食べた。もちろんここでも魚料理である。

食事の終わるころ小さな漁船が一隻、レストランの隣の栈橋に帰ってきたので、全員で水揚げを見学に行った。どうもレストラン隣の魚屋さんの船らしく、魚屋さんに断って、お店の横から栈橋に入らせてもらった。獲物は大きな鉋を持つエビで手長エビとザリガニの中間のようなエビである。茹でる前からオレンジ色で、食べれば美味しそうである。スウェーデンでは夏至祭には内陸産のザリガニをおなかいっぱい食べる風習があるそうだが、この港街の界限だけはこの海産のエビを食べるそうである。

現地の人とのふれあい、新鮮な地元の産物を見ることができ、楽しいひとときを過ごした。再びバスに乗ろうとすると、道の傍らに一辺80センチ程度の石の正四角柱が何本も並んでいる。それぞれ色や模様が異なっている。よく見るとすべて花崗岩であり、石材の見本らしかった。スウェーデンでは花崗岩はグラニートと呼ばれ、輸出品の一つである。

さてこのあたりには小さな洒落た別荘ばかりである。使われるのはもっぱら夏なので、街全体が閑散としている。敷地や建坪は、日本の高級建売住宅くらいの大きさだ。しかし、

この別荘を買おうとすると1軒1億円を切る物件はないそうだ。また、別荘の所有者はヨットやモーターボートも所有していることが多いそうである。ウッデバラでも多くの車の後部に、船などを搭載する牽引車を繋げる金具がついていた。やはり豊かな国なのだ。

その後は、他の港街など海岸線を中心に車窓からの見学を続けた。帰りにアグネッタが昼に漁船が採ってきたエビを茹でてもらっていて、全員に配ってくれた。殻が固く、剥くのに苦労したが、今宵の食卓に豪華な一品を添えることができた。歯ごたえがあり、エビとシャコの間のような味であった。エビの味もさることながら、アグネッタの優しい気持ちに心がとても温かくなった。

ウッデバラとお別れ

31日、いよいよウッデバラとお別れである。午前8時前には、交流団の方々もホストファミリーとともにカーリアホテルのロビーに集合された。お互い記念写真をたくさん撮っている。私に昨日一日一緒だったので、ホストファミリーの方々とは顔なじみになった。イエテボリ行きのバスが横づけされ、いよいよお別れである。バスの中の人も見送りの外の人にも目に涙がにじんでいる。別れを惜しんで見送ってくれるホストファミリーがいる交流団の方々为本当にうらやましかった。その後イエテボリから首都ストックホルムへ電車で移動し、午後、雨の中市内を見学し、翌朝スウェーデンを旅立ち、岡崎に帰ってきた。

終わりに

今回、友好の翼で参加された方の中には、前回のウッデバラ市民海外交流団に参加された方が数人いらっしゃるそうだ。一度ウッデバラ市を訪問された方はその魅力の虜になってしまう。私もご多分に洩れず、その虜となってしまった。必ずプライベートでもう一度訪ねてみたいと思っている。では、何に魅了されたのであろうか。いろいろ考えてみたが、少なくとも三つの要因があると思う。まず、ウッデバラの人々の人柄である。冒頭でも述べたとおり、知れば知るほど味わい深く誠実な人柄である。次に、歴史的街並み。ストックホルムのように圧倒するほどの建物はなく、こぢんまりとしているが箱庭にように歴史ある市街地の佇まいは日本人を魅了して止まないのだろう。最後に自然である。岩の上にある市街地でみられる自然や、郊外に広がる自然、風景はとても美しく、印象深いものである。次回は白夜をぜひ見てみたいと思う。こうした少なくとも三つの要因がバランス良く存在するとともに、歴史・石の街・堅実など岡崎市との共通項もあり、岡崎人にはとてもなじみやすいということもある。ぜひ多くの岡崎市民の方々にウッデバラを訪問してもらいたいと願っている。

今回の報告書が、暗闇の中にひときわ明るく暖かい中を見せてくれるウッデバラ市の家々の窓のように、多くの岡崎市民の皆様がウッデバラを知って、興味をもっていただくものになれば、幸いである。

最後に、今回の市民海外交流団のメンバー6名の皆様に心より感謝を申し上げたい。熱

心な探究心、高い識見と語学力、真面目でかつ細かい配慮をされる皆様を私は人生の師として仰ぎたい。



ありがとうございました

平成 20 年度 市民海外交流団名簿

	氏名	住所
団長	すが つとむ 須賀 勉	岡崎市藤川荒古
団員	あおやま みちお 青山 道雄	岡崎市池金町
団員	くぼた みえこ 窪田 三恵子	岡崎市羽根町
団員	きとう きょうこ 佐藤 京子	岡崎市井田町
団員	まつい ひろし 松井 弘	岡崎市六供町
団員	やなせ かずこ 築瀬 和子	岡崎市竜泉寺町
随員	ひろやま よしや 廣山 嘉也	岡崎市役所秘書課

平成 20 年度 市民海外交流団日程

月 日	時間	内 容	備 考
10月26日(日)	08:00 09:00 11:00 15:10 16:00 16:25 18:30	専用車で岡崎市役所発 セントレアへ セントレア着 セントレア発 AY080 ヘルシンキ着 ヘルシンキ発 AY677 イエテボリ着、専用車でウッデバラへ ウッデバラ市内ホテル着	ホテル泊
10月27日(月)	終日 午後 16:00 19:00	市代表団と共に行動 姉妹都市提携 40 周年記念事業に参加 ウッデバラ市内観光 雪見灯籠除幕式参加 歓迎夕食会	ホームステイ 市職員はホテル泊(以下同じ)
10月28日(火)	終日	ウッデバラ市内視察	ホームステイ
10月29日(水)	終日	ホストファミリーと行動	ホームステイ
10月30日(木)	終日	ホストファミリーと行動	ホームステイ
10月31日(金)	朝 09:42 12:45 午後	専用車でイエテボリまで イエテボリから 428 列車でストックホルムへ ストックホルム着 市内視察後、ホテルへ	ホテル泊
11月1日(土)	10:00 13:00 15:00 17:15	専用車で空港へ ストックホルム発 AY634 ヘルシンキ着 ヘルシンキ発 AY079	機中泊
11月2日(日)	08:55 10:00 11:00	セントレア着 市バスでセントレア発 岡崎市役所着	

お世話になった方々

Mr.Ralph Steen	ラルフ・ステーン議長
Mr.Sture Svennberg	スチュア・スベンバーグ執行委員会委員長
Mr.Jan Gurnarsson	ヤン・グンナールソン執行委員会副委員長
Mr.Henrik Sundstom	ヘンリック・サンドストローム副議長兼姉妹都市委員長
Mrs.Ylva Runnstrom	イルバ・ランストローム市政管理者
Mr.Stellan Hedendahl	ステラン・ヘデンダール文化部長
Mr.Magnus Jacobsson	マグナス・ヤコブソン公共事業委員長
Mr.Elving Andersson	エルピング・アンダーソン社会福祉委員長
Mr.Essam el Naggat	エサム・ナガー通商雇用委員長
Mr.Alf Gillberg	アルフ・ギルバーグ第2副議長
Mr.Lars Hultberg	ラス・ハルトベルグ氏
Mrs.Agnetha Riddar	アグネス・リダー女史
Mrs.Nina Schmidt	ニーナ・シュミット女史

(ホーム入)

Mr.Risto Jarvitalo and Mrs.Jaana Jarvitalo	(窪田 三恵子)
Mr.Bengt Lindberg and Mrs.Gunvor Lindberg	(青山 道雄)
	(松井 弘)
Mr.Kjell Delvret and Mrs.Valborg Delvret	(佐藤 京子)
	(築瀬 和子)
Mr.Anton Carlsund and Mrs.Eva Carlsund	(須賀 勉)

受入団体

Uddevalla Kommun ウッデバラ市
451 81 Uddevalla, Sweden
Tel 0522 69 60 00

取扱旅行社

近畿日本ツーリスト株式会社 岡崎支店
岡崎市明大寺町字川端 20 - 2
Tel 0564 23 3121 Fax 0564 23 5383